読書コンプレックス

文屋カノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
読書コンプレックス

【Ｎコード】
Ｎ７７２３Ｔ

【作者名】
文屋カノン

【あらすじ】
図書館で借りた本に挟まっていた、カレシの写真。誰かがしおり代わりに使っていたのだろうか。カレシの傍らで微笑む女は誰なのか？
疑問を持ちつつ向かった図書館で、冴香（さえか）はカレシによく似た男に出会う。ひょっとしたらあの写真に写っていたのは、カレシではなくこの男なのだろうか。カレシに風貌がよく似たこの男なのだろうか。

（前書き）

第４回小説新人賞に応募分を、加筆訂正しました。

小説を読む女子なら、たいていの人は１度は思うだろう、本を読む男と読まない男どっちがいい？　というのがモチーフです。

実際はどちらかを選ぶというシチュエーションは起こらなくても、本を読まない男と付き合うと、つい感じる物足りなさというか。だからといって、本を読む男が必ずしもいい男とは限らないというか。

その現実の中で思い悩む冴香が主人公です。ではお読み下さいませ。

図書館で借りた本に写真が挟まっていた。あたしは不審を覚えた。
誰かがしおり代わりに使っていたの？写真を？　これまでキャラクター入りのメモ用紙が挟まっていたことはあったけれど、写真が使われているケースは初めてだ。そして意図しない場面で彼氏の顔に対面することも。
羅馬（らうま）の写真が誰かにしおり代わりに使われているなんて。そして羅馬の傍らに微笑む女がいるなんて。
気にすることではないのかも知れない。写真の羅馬は今と髪型が違っている。羅馬はこんなに髪が長くないし身に着けているシャツにも見覚えが無い。羅馬と付き合ったこの三ヶ月、こんな黒シャツ姿の彼を見たことがない。
そもそも羅馬はモノトーンや襟付きのシャツを滅多に着ない。特に派手好みという訳ではないけれど、カーキとかモスグリーンなどのＶネックが羅馬の好みだ。それに羅馬はこんなに痩せていない。
多分昔の女なんだとあたしは思った。日付は入っていないけどきっとそう。写真の中の羅馬は妙に大人ぶっている。きっと背伸びをしていた時代に撮られた写真。あたしと出会う前の写真。
誰にでも過去はある。たまたま羅馬の昔の写真があたしの目の前に出現した。ただそれだけのこと。
そう思うのに妙に胸が騒いだ。羅馬の傍らで微笑む女があまりにも小柄なせいかも知れない。小さくてショートカットが似合っていて羅馬の体にすっぽりと埋まってしまいそう。
身長が１６５センチもあるあたしは、１７０センチの羅馬の傍らでこんなに愛くるしい雰囲気をかもし出せない。でも羅馬はあたしと出会う前に、こんな小さな女と付き合っていた。本当はこういう女が好みなの？　あたしの胸にじわりとうず痒い感情が渦を巻いた。
羅馬は本当にあたしを愛している？　タッパのあるあたしを本当

に愛している？

ぐるぐるぐるぐるうず痒い感情に巻き込まれていたら、メールの着信音が響いた。羅馬からだった。

ごめん。明日出勤になった。仕事終わったら連絡するから。

「何よ、馬鹿」

ケイタイの液晶を眺めながらあたしは悪態をついた。まだ夜の九時なんだから、デートのキャンセルは電話かけてくればいいじゃない。

付き合って三ヶ月、早くも羅馬の側に緩みが出ている気がした。あたしに安心しきっているんでしょう。あたしのことなめ始めているんでしょう。

ぐるぐるぐるぐる感情がどす黒く変わり始めて、あたしは慌てて図書館で借りた本を手に取った。物語の世界に逃げ込まなくては。羅馬のことを忘れなければ。

羅馬、羅馬、あたしがどれだけ本を読んだってその感想をあたしと共有してくれない恋人。本を読まない恋人。ローマ。その名の通り遠い人。あたしはもしかしたら羅馬を手に入れていないからこそ彼を好きなのかも知れない。まだ行ったことのないローマの地に憧れを抱くのと同様に。

五月の陽射しが寝不足の目にまぶしい。昨夜は結局、図書館で借りた本を三冊完読してしまった。本当は二週間持たせるつもりだったのに、現実から逃避したくて一晩で二週間分遊んでしまった。ストーリーが頭の中をぐるぐると回っている。その中心に羅馬と写真の女が毅然として佇んでいる。

彼らの存在を打ち消したい。もっとガツンとくる小説を読みたい。

そう例えば遠藤周作の『海と毒薬』のような。そんなことを思いながら図書館を訪れ文庫本のコーナーに立つと、背の高い男がパラパラと本をめくっているのが見えた。

推定二十代前半、少し長めの髪が黒いシャツの襟元にかかっている。珍しい。こういう風貌の男が図書館を利用するなんて。図書館で見かける男なんて大半がおじさんばかりなのに。

不況の影響なのかなあと思った。心情的には好きな作家の本は是非購入して売り上げを伸ばしてあげたいけれど、この百年に一度の不況下では、本好きなワーキングプア層は余程気に入った本でなければ購入がためらわれる。

不況の影響で家庭用ゲーム機が好調だなんて話も聞くけれど、OL二年目のあたしに言わせればゲーム機が買える人は金持ちだ。文庫本の値段なんてたかが知れているけれど、無料の魅力には抗えない。

まず無料で借り出してそしてどうしても欲しい本だけ購入する。そういったスタンスを取らなければ低所得者は破綻してしまう。だから貧乏な庶民が本を漁り読むためには図書館は必需品だ。幸いこの県には人口当たりの図書館の比率が高い。

そんなことを考えながら横目で男を観察していたら、不意に男がこちらを向いた。あっと思った。写真の男だった。

そうか。写真の男は羅馬ではなくこの男だったのか。そう思いながらあたしは更に男を観察した。見上げる程の背の高さ。筋肉の無さそうな体つき。羅馬より黒い髪。秀でた額。羅馬ではない。顔立ちは似ているけれど別人だ。

今にして思うとあの写真をどうして羅馬だと思い込んだのか、そちらの方が不思議だった。いくらあたしが人の顔を覚えないからといって恋人を他人と見間違えるなんて。あたしは本当に羅馬を愛しているんだろうか。本を読まない羅馬を愛しているんだろうか。

あたしの視線に気付いた男がけげんな顔をこちらに向けた。同時にあたしもけげんな顔で見詰め返した。男の動作は本を探している

人間のものとは違っていたからだ。それよりも何か本に挟まっている物を探しているような……。
そこまで思いついて、あたしはやっと
「失礼ですけど、ひょっとして写真をお探しですか」
と男に尋ねた。男は軽く目を見開くと「はい」と答えた。男の声は少し低かった。羅馬よりも少し低かった。
「図書館で借りた本の中にあなたの写真が挟まっていたので、もしかしたらそうじゃないかと思って」
「今それ、持ってますか」
「持ってません。うちにあります」
答えながらあたしは、アパートの引き出しに仕舞いこんだ写真のことを考えていた。羅馬に見せるべきなのかどうか迷ったまま仕舞いこんだ写真。あたしを一晩中苦しめたあの写真が赤の他人の物だったという事実にあたしは呆気無さを感じた。
「よかったら、返してもらえますか」
男はやや切羽詰った調子であたしに尋ねた。きっと大事な物なのだろうという思いと、そんな大切な物をどうしてしおり代わりに使ったのだろうという訝しさに頭の中がぐるぐるしながらあたしは
「構いません。何なら今から取りに行きましょうか」
と提案した。
「そうしてもらえれば、助かります」
男の言葉に後押しされるようにしてあたしは図書館を出た。桜はとうに散ったとはいえ今は一年で最も花の多い季節だ。アパートが図書館から自転車で二〜三分の位置で、本当によかった。あたしは家々の庭に咲き誇るアヤメや藤の花をぼんやり眺めつつ自転車を漕いだ。
帰宅したあたしは、引き出しから写真を取り出すと最後にもう一度二人をまじまじと観察した。写真の中の男はやはり羅馬に似ていた。
実物はもう少し違うのに、写真に切り取られると恋人と見紛う程

に似ている男。そんな男の傍らで幸せそうに微笑む女にあたしは少し嫉妬した。
図書館に着くと男は入り口の喫煙所で煙草を吸っていた。羅馬は煙草を吸わない。こんな行為からすらも羅馬との相違点をまざまざと見せつけられて、あたしは昨夜の自分の苦悩は一体何だったのかと思った。世の中には余計な勘違いから生じる嫉妬が実に多い。
男に写真を差し出すと、男は「確かに」と言ってそれを受け取った途端、捻り潰してゴミ箱に投げ入れた。あたしは思わず
「どうして捨てちゃうんですか」
と男に抗議した。
「別に俺には、必要無い物だから」
「必要無い物を、探してたんですか」
「だって嫌でしょう。自分の写真が図書館の本に挟まったまんまじゃ」
確かにその理屈は分からないでもなかったけれど、突然あたしの目の前で写真を捨てる男の神経をあたしは疑った。それともしかしたら失恋だろうか。あの小さな女とこの男は別れたのだろうか。
しかし考えてみれば、この男の背の高さを知った今あの女が本当に身長が低いのかどうかは疑問だった。あたしだってこの男の隣に立てば実際よりは背が低く見えるだろう。その想像はあたしを甘美なもので満たした。あたしは大きな男が好きだ。
そんなあたしの思いを見透かすかのように男が
「写真を届けてくれたお礼に、お茶でもご馳走しますよ。飲食ルームの販売機のお茶でよければ」
と誘いをかけてきた。
「でも、捨てちゃうような写真だったのに」
「捨てちゃうような写真のために、手間を取らせたお詫びですよ」
この男に対してうず痒い好奇心が生まれ始めていたあたしは、その申し出を受けることにした。自販機のお茶をおごられるくらいなら負担が無くていい。

男の後を歩いて飲食ルームに向かうと、いつもは混み合うテーブル席が今日は珍しく空いていた。自販機のお茶とはいえ、羅馬と付き合い始めて三ヶ月、他の男と二人きりでお茶を飲む機会を持たなかったあたしは少しときめいた。

恋人に似たかんばせの上に恋人よりも背が高く、本を読む男からの誘いは素直に嬉しかった。あたしはこの時から彼に好奇心を抱いていたんだと思う。

男はあたしのために紅茶を、自分のためにコーヒーを買って席に戻って来ると生山慶介（おいやまけいすけ）と名乗った。羅馬よりずっと平凡な名前だ。あたしは軽く失望しながら「小穴冴香（こあなさえか）です」と名乗り返した。

「コアナって珍しい苗字だね」

「小さい穴って書くの。何か欠落しちゃってる感じでしょ」

「何かが欠落してる方が、人間としては魅力的だよ」

事も無げに言い放つ生山にあたしの気分は高揚した。やっぱり本を読む男はいいと思った。会話にセンスが感じられる。

飲食ルームでの二時間の雑談は楽しかった。生山は写真の挟まっていた宮本輝を始め、随分色んな本を読んでいるようで、物知りな男と話すのは知性と感性が刺激された。羅馬もこれくらい本を読めばいいのに。そうすればあたしたちの絆はもっと深まるのに。そう思った。

飲食ルームが混み合い始めたので、あたしと生山は名残惜しげに席を立った。

空き缶をゴミ箱に投げ入れながら生山は

「そういえば冴香ちゃんは、本を借りる予定だったんだよね」

と尋ねてきた。言われてみればあたしはガツンと来る小説を借りたくて図書館を訪れたのだった。

けれど生山との会話が楽しく、あたしは小説に衝撃を求める気持ちを失っていた。でもそうはいっても本は読みたい。あたしは

「そういえば……。でもまだ図書館やってるしこれから寄って行きます」

と答えた。
「何、借りるつもりなの」
「まだ考えてないけど」
「よかったら俺の持ってる本読まない？　ぜひ感想を聞かせて欲しい」
生山の提案にあたしの心は弾んだ。この人が勧める本を読んでみたい。そして本を返すという口実でもう一度生山に会ってみたい。
生山の運転するアウディーで、あたしは彼のマンションに向かった。小洒落たマンションから生山の裕福さが感じられる。
宝飾会社の営業をしているという話だったけれど、この不況下にそんなに儲かっているんだろうか。訝りながら車の中で待っていると、生山は『村上龍料理小説集』を携えて来た。
宮本輝をあんなに褒めちぎっていたのに、この人のお勧め本は村上龍？　宮本輝と村上龍の取り合わせにあたしは少し面食らった。これがこの人の好みなんだろうか。随分振り幅の大きな人だ。
アウディーで図書館まで送り届けられ自転車で帰宅すると、あたしはそのままベッドにどさりと身を沈めた。生山と交わした会話の一つ一つが頭の中でぐるぐると駆け回り、あたしは幸せな眠りについた。羅馬と同じ顔をして羅馬とは全く違う人。こんな人もいるのねと思った。こんな人もいるのねと。

メールの着信音で目が覚めた。レースのカーテンだけを垂らしたワンルームに黄昏の気配が忍び寄っている。あたしは枕元のケイタイを広げた。午後六時四分。昨夜の寝不足のせいで寝入ってしまったらしい。あたしはベッドに寝そべったままメールを開いた。てっきり羅馬からかと思ったのに相手は隣室に住むせり姉だった。
彼氏が夕飯食べに来るって言うから、シチューを大量に作ったの

にブッチされた。食べに来ない？

ごめん。今夜羅馬に会うの。でも話がしたい。羅馬から連絡来るまでしゃべれない？

返信から五分もしない内に玄関のブザーが鳴った。扉を開くと、鶴のイラストをあしらったTシャツにハーフパンツをはいたせり姉が、タッパーを持って立っていた。シチューのおすそ分けをしてくれるらしい。ありがたい。

従姉のせり姉はこんな風にして時々料理を運んで来てくれる。一人暮らしの身としてはこんな嬉しいことはない。あたしは早速せり姉を招じ入れるとタッパーを冷蔵庫に入れお湯を沸かした。

約束をキャンセルされて機嫌が悪いせり姉には、気分を落ち着けるペパーミントティーを入れて、リラックスしてもらうのがいいだろう。

あたしが準備をしていると、せり姉は座椅子にゆったり腰を下ろし

「それで、話って何？」

と尋ねながらテーブルの上に頬杖をついた。水商売をしているせり姉はこういった怠惰な動作が何やらなまめかしくて、同性とはいえドキドキする。

あたしが昨日今日の出来事をかいつまんで説明すると、せり姉はネイルアートを施した爪を眺めながら

「つまり冴ちゃんは、その生山って人が気になる訳？」

と単刀直入に尋ねてきた。料理好きなのに仕事柄ネイルアートにも凝るせり姉の爪は美しいけれど短くて平たい。

あたしが正直にうなずくと、せり姉は

「羅馬君より気になる？」

と畳み掛けてきた。

あたしは一瞬自分の心にたじろぎながら

「分かんない。最近羅馬がホントにあたしのこと好きなのかよく分

かんなくなってきてるし」
　と答えつつペパーミントティーを注いだ。ひょっとして今精神を落ち着けなければいけないのは、あたしの方かも知れなかった。
「羅馬君が冴ちゃんに確実に惚れてれば、生山さんのことは気にならない訳？」
「……羅馬は、本を読まないから」
「羅馬君のことは、本を読まないところが魅力だったんじゃなかったの」
　その通りだった。あたしは実は読書をすることにコンプレックスを抱いている。本を読まないで済む人間はひょっとしたら強いんじゃないかと思っている。本に逃げないで済む人間は強いのではないかという気がするのだ。
　だがその一方で、本を読まない羅馬に物足りなさを覚えていることも事実だ。そして読書家の生山に惹かれ始めていることも。
　あたしが黙り込んでいると、せり姉は
「冴ちゃんは羅馬君の前にも、本読まない人と付き合ったことあったじゃん」
　と言って差し出したティーカップに手を伸ばした。
　白くて長い美しい指。この指先でせり姉は水割りを作り客の煙草に火を点けるのだ。あたしは何だかすっかり自分が子供になったような気分になった。
　五歳も年長で男あしらいを仕事にするせり姉を前にすると、あたしはいつも未熟な気分になる。決して水商売に憧れを抱いている訳ではないのに、せり姉と接していると、恋愛とか本を読む自分の弱さとか、けれど本から与えられる喜びとか、そんなことに心の整理がつかなくてぐるぐるしている自分が、たまらなく幼く感じられる。
　あたしはすっかり混乱しながら
「確かにあたしはこれまでに、本を読まない男と付き合ったこと何度かあるよ」
　とつぶやいた。

何度もあるのにそしてその度に物足りなさを感じてきたのに、またもや本を読まない男に魅力を感じて、付き合い始める自分が奇妙だった。
「でもその人たちは映画が好きだったんだっけ？漫画好きもいたっけ」
「そう。映画とか漫画ってジャンルは違うけど純粋なインプット行為でしょう？　でも羅馬は違うの。インプット行為をしないの。羅馬は『俺は友達が多いから、敢えてインプットをする必要が無いんだ』って言うの」
　するとせり姉は
「へえわたしには、ちょっと理解できないな」
　と形良く整えられた眉をひそめた。あたしは少しワクワクしながら「どうして？」と尋ねた。あたし自身、羅馬の言い分には納得できていないからだ。
「だって人との会話って、インプットと同時にアウトプットもしなきゃいけないじゃん。相手によっては何にもインプットできなくってアウトプットばっかになっちゃうこともあるし、わたしなんていつも店終わった後、自分がすっからかんになった気分になるよ。それでうちに帰って友達からのメール読んだりネット検索したりテレビ観たり本読んだりしてひたすらインプットにつとめる。じゃないと自分がからっぽになった気がして」
　急に饒舌になったせり姉を眺めながら、あたしは確かに客商売にはそういう側面があるんだろうなと思った。気心知れた相手との会話はストレス解消になるけれど、受身でやってくる客を相手にしていれば自分の中の何かが磨り減ってしまいそうだ。
　その時、あたしはふと思いつき
「つまり羅馬の周りには、話し上手が多いってことなのかな？」
　とせり姉に尋ねた。せり姉は
「かもね。それか羅馬君がものすごおく聞き上手なのか」
　と腹に一物ありそうな言い方をした。

こんな風にせり姉は、感じの悪い客をあしらっているのかも知れないと思った。馬鹿な男だったら気付かない皮肉。賢い男だったたら……、その場合はどうなるのかよく分からない。

けれどあたしは、せり姉の真意に気付いてしまったから

「嘘。ホントはせり姉そんなこと思ってないでしょ」

と頬をふくらませた。

「思ってないよ。いくら聞き上手な人間だからって会話だけでインプット満足なんて頭のキャパシティー小さすぎ。羅馬君は単にサービス精神が無いだけでしょ」

「つまり羅馬は、馬鹿でサービス精神が無いからインプットをしないってそういうこと？」

あたしがショックを受けながら尋ねると、せり姉は

「わたしはそこまでは言ってないよ。それを決めるのは冴ちゃんでしょ。羅馬君の魅力、何か見落としてないか考えてみたら？」

と遠くを眺めながら答えた。

多分せり姉自身は、羅馬に何の魅力も感じていないのだろうと思った。そしてそれでも自分が羅馬を好きなことをあたしは悲しく思った。

その時メールの着信音が響き渡った。羅馬からだった。あたしは

「ごめん。羅馬からメールが来た」

とせり姉に告げた。

せり姉は飲みかけのペパーミントティーをぐいと飲み干すと

「まあ生山さんのことは、向こう次第じゃないの」

と立ち上がった。

「そう思う。あたしが羅馬より生山さんを気に入ろうと気に入るまいと向こうにその気が無ければ始まんないから」

「読書好きの冴ちゃんが生山さんを気にする気持ちは分かるよ。男友達にしとけばいいじゃない。まあでも彼氏とそっくりな男を男友達にするなんて、何だか倒錯してるけどさ」

せり姉の言葉はあたしの胸にズキンと突き刺さった。あたしは羅

馬の顔が好きだ。彼は冷たそうな色男だから。そして羅馬によく似た生山さんも。
せり姉を送り出してから、羅馬から来たメールを読んだ。

今、仕事が終わった

短いメールにあたしはつい舌打ちをした。仕事が終わったから何なんだ。これでは元々今日あたしと会おうと言っていた約束は今でも有効なのか分からないじゃないか。
けれどせり姉の誘いを断った以上、あたしは羅馬と会わなければ収まりがつかず

夕飯どうする？

と返信した。まるで夫婦のようなやり取り。それがあたしにはさっぱり面白くなかった。

第三のビールを片手に玄関口に立った羅馬の姿を認めると、あたしの心はすぐさま恋しさでいっぱいになった。鋭い目つき。薄い唇。程良く筋肉の付いた体つき。羅馬の肉体はあたしの好みのパーツでいっぱい。
そんな男があたしに会いに来てくれた。そいつがあたしの部屋にいる。これから二人だけの時間を過ごすのだ。それで充分じゃないかと思う。
けれど玄関に出迎えたあたしの目の前を、羅馬がするりと通り抜けた瞬間、あたしは早速物足りなさを覚えた。以前なら玄関で出会った瞬間、あたしを抱きしめてくれたのに。ゆるみが出ていると思った。羅馬は付き合い始めのときめき期を終えて次の段階に移ろう

としている。
あたしはまだときめいているのに、羅馬はあたし一人を置いて次の段階に移ろうとしている。それは何期？　倦怠期？　冗談じゃないわ。まだ付き合ってたった三ヶ月なのに。
苛立ちながら第三のビールを冷蔵庫にしまっていると、背後から羅馬が
「シャワー借りるぞ」
と声をかけた。あたしは「どうぞー」と答えながらチラと羅馬のスポーツバッグを眺めた。
着替えは持って来たのだろう。でもタオルは持参していないに違いない。あたしはクローゼットからバスタオルとフェイスタオルを取り出すと羅馬のスポーツバッグの上にぽとりと置いた。いつもの行為だというのに今日はなぜか少し億劫だった。
浴室からシャワーの音が聞こえてきた。あたしは羅馬に降り注ぐ湯飛沫があたしの言葉ならいいと思った。
羅馬が会話でインプットを図るタイプなら、あたしの言葉を雨あられと降り注ぎたい。そして羅馬の中をあたしの言葉と哲学でいっぱいにしたい。でもあたしの思想を吹き込まれあたしに感化された羅馬はやはり本を読まなければおかしいと思う。けれど羅馬は決して本など読みはしないだろう。
その確信があたしを打ちのめしたその時シャワーの音が止んだ。あたしはのろのろとキッチンに向かうと、タッパーの中のシチューを鍋に入れガステーブルのスイッチを捻った。シチューの中にはほうれん草やら人参やらに混じってローリエが浮かんでいた。
さすが料理好きな人はやることが違う。あたしなんてローリエが入っても入らなくても味の違いがさっぱり分からない。
あたしはせり姉に感心しながら鍋をかき混ぜると、あとは冷凍保存してある食パンをトーストして、サラダでも作らなければと考えた。食べ終えたら冷蔵庫からヨーグルトと何か果物でも出そう。それはとても面倒臭い行為だけれどもやらなければ。羅馬は家事は女

がやるものと思い込んでいる男だから。
非常に気乗りしない思いでキッチンで立ち働いていると、浴室から羅馬が丸裸で出て来た。このアパートには脱衣所が無いのだから仕方が無いことだけれど、あたしは何となく嫌な気がして羅馬の方を見なかった。
付き合ってたった三ヶ月なのに、ベッドの上以外で男が全裸になっているなんて。ゆるみだと思った。倦怠期だと思った。本を読まない男との倦怠期。嫌だ。嫌だ。嫌だ。
羅馬がテレビを点け、フェイスタオルを頭に巻いたままスポーツバッグからジャージを取り出した。テレビはインプット？　とあたしは疑問に思った。嘘だと思った。テレビなんてインプットとしては物足りない。時間辺りのインプット量が読書と全然違う。あたしなんかたまにテレビのテンポに合わせられなくてテレビを早送りしたくなっちゃう程なのに。
それでも羅馬にとってはテレビがインプット？　嫌だ。本当に？
羅馬はせり姉が言う通り頭のキャパシティーが小さいの？　ねえ嘘でしょう？　あたしがときめいているあなたは、そんな人じゃないでしょう？　あなたは強いのよね？　強いんだって言って。お願い。強い証を見せて。
「どうかしたのか」
テーブルにシチューを運ぶあたしに、羅馬が突然尋ねた。
「どうかって、何が」
「眉間に、シワが寄ってる」
「そう、気付かなかった。それより食べよう？」
あたしが促すと、羅馬は「ああ」と言って第三のビールを一口飲み、そして
「なあ俺ら、そろそろ一緒に住まねえ？」
と言い出した。
あたしは飲みかけの第三のビールが変な所に入ってしまい、ゴホゴホむせた後、ようやく

「それって同棲ってこと？」
と尋ねた。いつの間にかテレビのスイッチは切られていた。
「そう俺ら、お互い一人暮らしだし、この際一緒に住んじゃわねえ？」
羅馬のアパートならあたしも何度か訪れたことがある。羅馬は両親とうまくいっていないため一人暮らしをしているのだ。ぜんそくにいいからと空気の綺麗なこの地方の短大に進学を決め、そのままここに居ついてしまったあたしとは境遇が違う。
あたしは羅馬が両親と不仲なことは、たいして気にしていなかったけれど、不仲になった具体的な理由を聞かせてくれないことが不満だった。羅馬はあたしを信頼していないのだ。それなのに突然同棲とは一体どういう風の吹き回しだろう。
訝りながらあたしは
「だってまだあたしたち、付き合って三ヶ月でしょ」
と答え再び第三のビールを飲んだ。まだ胸元のつかえが取れない。
羅馬の誘いに、まるっきり心が揺れなかったといえば嘘になるけれど、あたしは同棲というものにあまり好感情を抱いていなかった。
「三ヶ月って短いか？」
「あたしにとっては短い。あたしはまだ羅馬のことよく知らないもん」
「一緒に住めば俺のこと、もっとよく分かるようになるんじゃねえの」
食パンをぱくつきながら冷静に言い放つ羅馬に対しあたしは、この人はなぜ傷付かないんだろうと思った。あたしだったら同棲を提案した相手に
「自分はあなたのことを、まだよく知らない」
などと拒否されたら多分傷付くと思う。
けれど目の前の羅馬は、平然と食パンをちぎりシチューに浸して食べていた。今の羅馬にとってはあたしとの同棲が目的であって、その目的を達するための話し合いの最中に何を言われようと、そん

なことはたいした問題ではないようだった。
　羅馬のこういう図太さをあたしはあまり好きではない。けれど好きではないからこそその図太さにあたしは惹かれる。繊細ではない方が人は生きていき易い。羅馬の図太さに生命力を感じるのはあばたもえくぼというやつだろうか。
　そんなことを考えながらあたしは
「別に今までの付き合い方でも、羅馬のこと少しずつ知っていくことはできると思うけど」
と答えた。
　羅馬を知るという観点から考えれば、確かに同棲をした方が手っ取り早いかも知れない。一緒に住めば羅馬がなぜインプットをしないで済む人間なのか分かるようになるかも知れない。あたしは羅馬の心の強さを知り彼をますます好きになるかも知れない。
　だが逆は？　せり姉の言う通り羅馬がただのお馬鹿さんでインプットをしない人間なのだと分かってしまったら？　あたしは失望し羅馬との別れを考えるかも知れない。その場合同棲をしていてはリスクが大きい。同棲のために引越しをし別れのためにまた引越しをすることになってはお金と手間の無駄だ。
　すると羅馬は
「冴香は俺とずっと一緒にいたいとか、思わん？」
　と切り札を出してきた。愛し合う恋人同士は常に一緒にいたいと思い合うことが多分美徳なのだ。もしあたしがそう思っていないとするとあたしは薄情な恋人ということになる。
　けれどあたしは
「同棲したってずっと一緒にいられる訳じゃないでしょ。お互い仕事もあるんだし」
　と現実的な返答をすることができた。
　羅馬とあたしは、会社は違うけれど同じＬＰガス業界に勤めている。羅馬はガスボンベの配送であたしは事務員で生計を立てている。働かなければ食えないのだから、仮にあたしたちがずっと一緒にい

たいと思い合っていたとしても、そんなことはどだい無理な話なのだ。
「でも働いてる時間帯は大体一緒だろ？　一緒に住めば仕事が終われば俺らはずっと一緒にいられる」
熱っぽく語る羅馬の言葉によって、あたしの頭の中にぴゅっと二人の同棲生活がイメージとなって入り込んだ。仕事が終わる。羅馬に会いたいと思う。約束をしなくても帰宅しさえすれば羅馬に会える。素敵。
でも同僚に飲みに誘われるかも知れない。友達からだって誘いは来るだろう。来なくてもあたしの方から誰かに会いたくなるかも知れない。ああでも駄目だ。同棲などしてしまったら周囲は遠慮するだろう。
同棲が周囲に知れ渡ればあたしは孤立する。羅馬と家に縛り付けられる。そして家事は女がするものと思い込む羅馬によって仕事と家事と羅馬だけの日々を過ごすのだ。そんなことにはとても耐えられない。まだ二十一歳なのにどうしてそんな所帯臭い生活を始めなければいけないのだ。
「だったら羅馬も、少しは家事を分担してよ」
そんなセリフが喉元に込み上げたけれど、あたしはその言葉を飲み込んだ。あたしが同棲を嫌がるのは家事だけが原因ではないからだ。あたしは友人たちと遠のくことが怖い。同棲という言葉の持つだらしなさを嫌悪している。そして、本を読む時間が減るだろうことが辛い。
だからあたしは
「だって同棲なんて、親が許さないよ」
と手っ取り早く話を切り上げようとした。
「親」という単語を出した途端、羅馬は嫌な顔をした。羅馬自身が親と関わっていないため、親と関わるあたしへの羨望を覚えたのか、それともあたしのセリフが切り札になったためかは分からない。
けれどそんなことはどちらでもよかった。あたしは

「引越しなんかしたら親に連絡しなきゃいけない。連絡したらどうして引越したのか根掘り葉掘り聞かれるよ。正直に『羅馬と暮らす』なんて言ったら親乗り込んで来るよ。親が納得する嘘理由なんてあたし思いつかないよ」

とまくし立てた。

「『もっと安いアパートを見つけたから、引っ越す』って言えばいい」

「ここ月五万だよ。ここより安いアパートっていくら？　四万？　三万？　そんなアパートで羅馬と暮らすの？　新しいアパート、親絶対見に来るよ。明らかに安そうなアパートじゃなきゃ親納得しないよ。これから本当にそんなに安くて二人が住めそうなアパート探す訳？　どこにあるの？　そんなアパート。僻地？　僻地から毎朝出勤すんの？　あたし七時半までに、出勤しなきゃいけないんだよ。無茶言わないで」

「俺がこのアパートに、引っ越して来ればいい」

「この狭いワンルームに？　羅馬の荷物しまいきれないよ。親が来た時、男と暮らしてる形跡バレバレ。無理」

本当は、親がこのアパートを訪ねて来ることなど滅多に無いのだけれど、あたしは口から出任せを言った。実際に親は年に一度程あたしを訪ねて来るけれど、目的はあたしの暮らしぶりを見るためというよりこの地方の観光だ。

清里高原に湖にワイナリー巡り。この地方は観光スポットに事欠かない。両親はあたしをお供に連れて観光をして帰るのだ。

だから引越しさえしなければ、羅馬と暮らすことは不可能ではないのだけれど、あたしはそう言い張った。羅馬と暮らすなんて今のあたしには真っ平だった。

そこまで言い張ると、ようやく羅馬は「分かったよ」と引き下がったけれど、代わりにあたしをベッドへ引っ張り込んだ。

食後すぐのセックスは嫌だなあとか、先に歯磨きと食器洗いをしたいなあなどと思ったけれど、同棲を断ったことによって何だか罪

悪感を覚えていたあたしは、そのまま羅馬と共にベッドになだれ込んだ。
羅馬と寝るのは嫌いではない。羅馬はとても飢えた様子でセックスをする。快楽の波にぐるぐる翻弄されながらあたしは愛されているんだなあという気になれる。羅馬の舌があたしの舌を口内から誘い出し、ディープキスをしながらあたしはセックスもインプットとアウトプットだなあと漠然と考え始めた。
セックスをしながら考え事をするのは楽しい。一人であれこれ考えていると拡散してしまって訳の分からなくなる思考が、快楽という愛すべき邪魔者がひっきりなしに襲ってくるベッドの上では、一つのまとまったシンプルなものになる気がする。
羅馬があたしの耳たぶに唇を這わせる。快楽が来た。インプット。あたしは歓喜の溜め息を吐く。アウトプット。
インプット。アウトプット。インプット。アウトプット。
そういえば誰かがセックスは体の会話だって言っていたっけ。会話、会話か。友達が多いからインプットの必要が無い羅馬。セックスの好きな羅馬。セックスも体の会話だから好きなの？　インプットとアウトプットだから好きなの？
セックスも、インプットとアウトプット。
セックスも、インプットとアウトプット。
ねえ羅馬、あなたは本当に、純粋なインプット行為をしないで生きているの？　どうしてそうやって生きられるの？　どうして本を読まないの？
羅馬が果てた。羅馬の体の重みを感じ呼吸を整えていると不意に頭の中で生山の声がした。
「一緒に、住まない？」
なぜ生山が？　あたしが体を硬直させると羅馬があたしの唇を捜しキスをした。その瞬間ぷんとシチューの匂いが立ち上った。行為の最中には気付かなかったのに、なぜか今頃になってシチューの匂いが鼻をついた。

寝不足の頭を振りながら予約していたヘアサロンに向かった。なぜ寝不足かというと、羅馬があの後三度もあたしを求めてきたからだ。

羅馬は一度のセックスに大体一時間くらいはかける。それを合計やられたのだからあたしは四時間セックスをしていたことになる。

羅馬と寝るのは嫌いではないけれど、そんなに続けざまにするのは嫌だ。あたしはセックスは一晩に一回でいい。それも毎日しなくてもいい。多くて週に二、三度。そんなものでいいと思う。

けれど羅馬はセックスが好きだからあたしはとても逆らえない。ある時などするしないで揉めていたら一時間が経過してしまった。それでも尚あたしを求める羅馬を見ていたら、一時間前に了承していたらあたしは今頃解放されていたんだなあと思い当たった。それ以来馬鹿らしくなって羅馬の求めを断るのを止めたところ、それ以降、羅馬はやりたい放題だ。

ひょっとしたら羅馬はもっとセックスがしたくて、それで同棲を持ちかけてきたのかなあと思った。そんな男と暮らした日には会社と家事とセックスだけで日々が流れていってしまうことだろう。とても体がもたない。あたしはやり殺されてしまうかも知れない。

寝不足の体にその想像はズシンとこたえて、あたしは力無くヘアサロンの扉を開けた。カランコロンと扉に付けられたチャイムが鳴る。いい音。あたしを眠りに誘うみたい。

「いらっしゃいませ」

出迎えるスタッフの声も可愛らしい。子守唄に向きそう。

しかし次の瞬間あたしはすっかり目が覚めた。受付に立っている女に見覚えがあったのだ。これは生山の隣で微笑んでいた写真の女じゃないか。

あたしはうろたえながらメンバーズカードを取り出し

「十時に予約していた小穴です」
と震える声で名前を告げた。
「はい、小穴様ですね。お待ちしておりました」
相変わらず可愛らしい声色で女が微笑む。そうその微笑みだ。ショートカットの似合うボーイッシュな微笑み。それなのに声はこんなに可愛い女だったのか。ちきしょう。こういう女にはショートが似合う。声が甘ったるい女は外見をこざっぱりさせると魅力が映えるのだ。
「お荷物、お預かり致します」
「こちらで、しばらくお待ち下さいませ」
やめろ。やめてくれ。その声をあたしに聞かすな。その鈴を転がすような声で生山に何を語りかけているんだ？　何をしゃべった？
何をしゃべったんだ？　生山に何をインプットしたんだ？
突然湧き起こった感情に、頭の中がぐるぐるかき乱された。あたしは指定されたソファーに身を沈め、ヘアカタログを眺める振りをしながら女をチラチラとのぞき見した。
写真の印象程ではないが背丈はあたしより低い。１５８センチ前後というところか。髪の色はマッシュ系。写真で見た時と同じ。目は写真で見た印象より小さい。目の大きさはあたしの勝ち。まつ毛のエクステはしていない様子。けれどあたしよりマスカラを重ねている。
そこまで観察をしていたら、馴染みの美容師の曽我（そが）が相変わらず長いゆるゆるとした髪をなびかせながら
「小穴さん、お待たせしましたあ」
とやって来た。彼女のことはここ最近何度も指名している。生山の写真に写っていた女が曽我ではなくてよかったと思った。もし曽我だったら居心地が悪くて仕方が無かっただろう。
曽我に鏡の前の席に移され
「今日は、どうなさいますかあ？」
と尋ねられたあたしは鏡の中の自分を見詰めた。象と小花模様を

あしらった赤いシャツの肩で癖毛がカールしている。
　あたしの癖毛は、まるでパーマをかけたようにふわふわとしているのでパーマ代がかからず経済的だ。おまけにこてで巻かなくてもワックスを付けるだけでセットが完了する。傍目には癖毛風にセットしているように見えるのだがこれは正真正銘の癖毛だ。
　けれど今日は、春の盛りを意識してショートボブにしようと思っていたのだ。ショートボブにして重みの無くなった髪は更に癖を発揮してあたしの顔周りを華やかにするはずだった。しかし髪を短くしたらあの女とかぶってしまう。
　あたしは
「伸ばしていきたいんで、長さはこのままで」
　と指定し、曽我の
「じゃあ左側が重たいので、その辺のバランスを取るようにカットしていきますねえ」
　の提案に頷いた。
　髪の色はピンク系に染めてもらうことにした。そうすれば仕上がりはやや赤みがかった茶色になる。あたしは自分の容貌を少しでも写真の女とは違うものにしたかった。もし生山の好みのヘアスタイルがショートでアッシュ系だったとしても、あたしは写真の女とは違う存在でいたかった。
　シャンプー台へは写真の女に誘導された。この女にシャンプーをされるのかとあたしは複雑な思いを抱いた。
　このあどけない顔立ちと、シャンプーガールという位置を考えると彼女はあたしと同年代か。あたしより一歳上だと言っていた生山ともほぼ同年代ということになる。そしてもちろんあたしと同い年である羅馬とも。
　もしあの写真が生山ではなく、当初思った通り羅馬だったとしたら？　と考えてみた。あたしは今よりもっと嫉妬を覚えたことだろう。なぜなら羅馬はあたしの恋人だから。
　けれど恋人ではない、ただ一度しか会ったことのない生山の隣で

微笑んでいたこの女にあたしは確かに嫉妬をしていた。それはなぜだ。生山が羅馬に顔が似ているからか。それとも生山が羅馬と違って読書をするからか。

シートが倒され顔にタオルがかけられ、あたしの髪にシャワーが注がれた。「熱くないですか」と女が問う。「大丈夫です」とあたしは答える。

もしもこの女があたしの想いを知ったなら、熱湯を浴びせられてしまうのかも知れないなどとふと思う。けれど女は適温のシャワーであたしの髪を湿らせ優しく丁寧に頭皮を洗う。ぞくぞくする程気持ちがいい。

ひょっとしたら恋敵になるかも知れない女。生山に写真を捨てられた女。それを目撃したあたし。恋人がいながら生山を気にかけるあたし。それを知っているのは今ここであたしだけ。女は何も知らずにあたしの頭皮を洗う。丁寧に。丁寧に。

少しうとうととした。何だかこの女のことを好きになり始めていた。生山に写真を捨てられてしまった女を。何も知らずあたしの髪を洗う女を。

けれど次の瞬間、あたしは生山もこの女に髪を洗われたのではないかと思い当たり目が覚めた。その想像には信憑性があると思った。

生山もここの客で、二人はこのヘアサロンで出会ったのかも知れない。女はあたしにしたように丁寧に丁寧に生山の髪を洗い、指先は首筋にまで伸び、生山の性感帯はこのシャンプー台の上でまさぐられ……。

嫌だ、やめて。あの人に快楽をインプットしないで。それともシャンプーもインプットとアウトプット？

湯で髪を湿らされる。インプット。

素洗いされ垢が落ちる。アウトプット。

シャンプーを付けられる。インプット。

髪をすすがれ垢が落ちる。アウトプット。

ああそんなことなどどうでもいい。アウトプットが絡もうと絡む

まいとあの人と関わらないで。あたしが関わりたいの。インプットでもアウトプットでもあたしが生山とやりたいの。お願い。手をひいて。あなた写真捨てられたじゃないの。付き合っていたのかどうか知らないけれどあなた写真捨てられたじゃないの。

「シート上げます」

という女の声であたしは我に返った。いつの間にかあたしの頭にはタオルが巻きつけられていて、「お疲れ様でした」の声を背後にあたしは散髪用の席へと誘導された。何だか長い夢を見ていたような気分だった。

ジャキジャキと髪を切られている間、あたしは手渡されたファッション誌に見入っていた。今年はドット柄が流行中。スカートはハイウエストが主流。太いベルトは必需品。それが何だという思いと、羅馬と生山のために、流行をキャッチしなければという矛盾した思いに駆られて、あたしはファッション誌を読み漁った。

普段なら美容師との会話を楽しむのを常としているのに、今日のあたしは曽我と何をしゃべったらいいのかさっぱり分からず、雑誌に逃避していた。美しくスタイルのよいモデルたちが、流行の服を身にまとい誌面の向こうからあたしに微笑みかける。あたしもこんなに美人だったらなあと思う。

ここまで完璧に美しければ、羅馬もきっとあたしを愛してくれるのに。生山もきっとあたしに好意を抱いてくれるのに。

愚にもつかない妄想に取り付かれていると

「今日は小穴さん、いつもと感じ違いますねえ」

と曽我が話しかけてきた。

「そう？　恋煩いかなあ？」

「え、どんな相手ですか」

「冷たそうなイケメン」

羅馬と生山のかんばせを思い浮かべながらあたしは答えた。かんばせの似ている二人。そのどちらに恋煩いをしているのか自分でも分からなかった。本を読まない強いかも知れない羅馬か。それとも

本を読む自分と同じ匂いを発する生山か。
訳が分からず頭がぐるぐるしていると、曽我が
「冷たそうなイケメンが好みなんですかあ。しーちゃんと一緒ですねえ」
となぜか機嫌がよくなった。
「しーちゃん？」
「さっき、小穴さんのシャンプーした子ですよ」
「ああ、あの子」
あの写真の女、しーちゃんという女も冷たそうなイケメンが好みだということは、しーちゃんも生山に恋愛感情を抱いていた可能性があると思い当たった。いやそれともその恋愛感情は現在進行形か。あたしが不愉快な思いを抱いていると、そのしーちゃんがカラーリングの手伝いにあたしの元へとやって来た。
「しーちゃん、小穴さんも冷たそうなイケメンが、好みなんだって」
会話の糸口ができたとばかりに、曽我はしーちゃんに話題を振った。しーちゃんは「そうなんですかあ」と嬉しそうに会話に加わってきた。
「冷たそうなイケメンっていいですよね。そういう人にちょっと優しくされると、優しそうな人に優しくされるより何だかありがたみ感じちゃう」
鈴を転がすような声で語られたしーちゃんの恋愛観は、あたしと同じものだった。いつもニコニコしている男に優しくされるより頑固親父の一瞬の微笑みにありがたみを感じてしまうのと同じだ。あたしは「そうそう」と相槌を打ちながら複雑な思いを抱いた。
普段なら男の好みが合う女とは意気投合するのだけれど、しーちゃんが生山と関わっているのなら話は別だ。あたしは
「しーちゃんには今、好きな人いるの」
と探りを入れた。
「んーちょっと微妙な関係の人はいるんですけどねえ。何せその人見かけが冷たいだけじゃなくて実際に冷たいから」

確かにあたしの目の前で、しーちゃんとの写真を捨て去った生山は、実際に冷たい男と言えた。けれどそれはしーちゃんに対してだけかも知れない。生山はしーちゃんに飽きそれで冷たくなったのかも知れない。あたしは希望的観測を持ちながらあたしの髪にカラーリングを施すしーちゃんを鏡を通して眺めた。
一目見ただけでは忘れてしまいそうなあっさりした鼻。これは美人の特徴の一つだ。鼻というものは印象に残らない方が相手に好印象を与える。チークの入れ方も上手い。客観的に見たらあたしとしーちゃんのどちらが美人だろうか。いや生山の好みの顔つきは一体どちらだろうか。
本当はしーちゃんの好きな相手の素性を追及したかったのだけれど、そうするとあたしも恋煩いの相手を追及されかねない。そしてもし相手が生山であるとお互いが勘付いてしまったら、気まずいことこの上無い。
あたしはこれ以上探りを入れることを諦め、もうこのヘアサロンを訪れるのはこれで最後になるかも知れないと考えた。散々ヘアサロン巡りをし、ようやく見つけた居心地の良いサロン。けれどここに勤めるしーちゃんが生山と関係があるのなら、もうここに来るのは気まずい。
これでお別れなのかと感傷にひたりながら、あたしはサロンの中を見渡した。ずらりと並んだシートと鏡。一面ガラス張りの窓。窓の向こうに見えるラーメン屋。これらの景色とあたしは今日決別する。生山と関わりのあるヘアサロンにはもう来られない。
そこまで思い詰めた時あたしは生山を好きだと思った。馴染みのヘアサロンを替える程あたしは生山を好きだと思った。あたしには羅馬がいるのにそれでもあたしは生山を好きだと思った。
会計を終えた後
「また、お待ちしております」
の挨拶に見送られながら、あたしは名残惜しい気持ちでいっぱいだった。

曽我は決して美人の類ではない。髪をゆるゆるとしたロングヘアーにしているけれど、スカートを履かないせいかしーちゃんとはまた違ったボーイッシュな雰囲気をかもし出している。あたしは曽我が好きだった。美容師には会話が下手な者が多い中、聞き上手な曽我とは会話が弾んだ。

けれどもうお別れなのだ。曽我が悪い訳ではない。しーちゃんがここに勤めていることが問題なのだ。

あたしは先程しーちゃんに好意を抱いたことなどすっかり忘れ、しーちゃんを憎みながら駐車場に向かった。駐車場の片隅の駐輪場にあたしのママチャリが停まっている。あたしがそちらへ向かった時、後方でバタンと車のドアが閉まる音がした。何気なく振り返ると見覚えのあるアウディーから生山が出て来る姿が見えた。

相変わらずの黒シャツに、黒パンツを合わせた殺し屋のようないでたちの生山の姿を見つけ、あたしはやはり生山がここの客だったことを知った。偶然に驚きながら生山のアウディーに近づくとあたしは「こんにちは」と声をかけた。

「あれ、冴香ちゃん？」

生山が嬉しさと困惑の混じったような顔であたしを見詰め

「やあ知らなかったなあ。君もここの美容院だったんだ」

と屈託の無い笑顔を向けた。

「そうなの。生山さんは今から？」

「そう、一時に予約してたからね」

「写真の女の子、見ちゃった」

あたしがいたずらっぽくそう告げると、生山はきまりの悪そうな顔をしたが、あたしは知らん振りをして「じゃあね」と自転車にまたがって走り去った。

写真を捨てていたくせにこのヘアサロンには来るのかよ。しーちゃんとは一体どういう関係なんだよ。聞きたいことは山程会ったけれどあたし振り向きもせず自転車のペダルを漕ぎ続けた。自分の生山への想いを告げるにはまだ早すぎる。そんな気がした。

ヘアサロンの帰りに、ドラッグストアに寄って日用品の買い出しをしていると生山からメールが来た。話したいことがあるから会えないかという。あたしはそのメールにほくそ笑み

でもあたしまだ生山さんに借りた本読んでないんだけど、返す時じゃ駄目なの？

と返信した。こうやって相手の誘いを焦らすのは快感だった。今は午後の一時半。ヘアサロンで慌ててメールを寄越した生山が可愛らしく思えた。そしてそのメールに対する返信は早かった。あたしが本を読み終わるまで待てないから、とにかく時間を作ってくれないかというのだ。

結局今夜の夕飯を共にすることを約束すると、あたしは大慌てでスーパーに寄って一週間分の食料を買い込み、帰宅するなりドレッサー代わりに使っているチェストの前に座った。

今着ている象に小花模様をあしらった赤いシャツは、何だか個性的であまりデート向きとはいえないけれど、この服装は生山に見られているから着替える訳にはいかない。しかもヘアサロンに行く際は、邪魔にならないようピアスも小ぶりにしてネックレスも付けないから、今日のあたしはますますデート使用の格好とはいえなかった。

けれど仕方が無い。先程、生山と会った際以上にめかし込んでいてはあたしが張り切っているのがばれてしまう。

あたしはせめてものお洒落心で化粧を丹念に直すと、コロンを手首に降りかけそれを耳たぶの裏にすり込んだ。香りは下から上に立ち上る習性を持っているので、足首にも少しだけスプレーする。

友達がグアム土産にと買って来てくれた、何だかよく分からない

メーカーの物だけれど、香りが爽やかで気に入っている。これは図書館で出会った時にもつけていた。あたしの香りとして生山が早く覚えてくれればいいと思う。コロンが香る程あたしの体温が上がればいいと思う。生山が上げさせてくれればいいと思う。

アパートまで生山はアウディーで迎えに来てくれた。これに身を滑り込ませるのは二度目なのに、羅馬の愛用しているキューブより高級な車に乗れることが嬉しくて、あたしはそわそわと車に乗り込んだ。

アウディーの中では、クイーンのボヘミアンラプソディーが流れていた。そういえば昨日かかっていた曲はドアーズだった。どうやら洋楽がお好みらしい。キューブの中でいつもカーラジオをつけている羅馬とは違って洗練されている気がする。

「あたし洋楽って、歌詞が分からないからあんまり聴かなくて」

と白状すると生山は

「これは単純に訳せば、俺は人を殺してしまったからもうママの元へは帰れないって意味なんだけど、薬をやってしまったからとか男と関係してしまったからっていう解釈もできるんだよ」

と親切にレクチャーしてくれた。

格好つけで洋楽を聴く男は好みではないけれど、歌詞を理解した上で曲を聴く生山はいいと思った。その点羅馬は音楽というものを愛さない。流行曲を覚えカラオケで歌いそして流行と共に持ち歌を替える。

そんな姿勢では曲の持つメッセージを、インプットすることもできやしないだろう。芸術や思想の表れになり得る音楽を消耗品として扱う羅馬。つまらない男。自身のつまらなさゆえに物事をつまらなくしてしまう男。けれどそんな一般大衆的な姿勢で生きていける強い羅馬。

ぼんやりとそんなことを考えていると、アウディーは何やら高級そうな寿司屋の駐車場に入って行った。回らない寿司屋に入ることなんて会社の上司におごられて以来だったから、あたしは何だかド

キドキした。この不況下にどうしてこの人はこんな大層な店にあたしを連れて来るんだろうと思った。
寿司屋に入ると生山は
「普段はカウンターで握ってもらうんだけど、今日は話があるから奥の座敷にしよう」
と客たちから離れた座敷に上がり込み
「注文は、任せてもらっていい？」
とあたしに尋ねた。
こんな店で、一体何を頼んだらいいのかさっぱり分からないあたしはこれ幸いとうなずくと座布団の上に正座をした。今日はレギンス無しでミニスカートを履いて来てしまったから、正座には少し抵抗があったけれど、どうせテーブルが邪魔して生山の前でパンチラしてしまう恐れはないだろう。
「冴香ちゃんは、アルコールは飲むのかなあ」
「飲めるけど生山さん運転でしょ？あたし一人で頂いちゃうのは……」
「構わないよ。俺は酒飲めないし」
へえと意外な感じがして生山を見詰めると、生山は
「ビールにしとく？それともビールは寿司には合わないかな」
と言いながらメニューに目を落としていた。ならばメニューをあたしに渡してくれればいいのに、生山はあたしの飲み物すら自分で決めるつもりのようだ。
何だか強引な人だなあと思いながら、あたしは
「そうね。生魚にビールは生臭いかな」
と答えた。あたしは生魚を食べる時はいつもサワーを飲むことにしている。
ところが生山は
「じゃあ、日本酒いってみようか」
と勝手に山梨の地酒だという、シュンノウテンのフガクなる銘柄を注文してしまった。

下戸のくせになぜ酒の種類に詳しいのだろう。営業の仕事をしているせいだろうかと考えていると、寿司やら酒やらがテーブルに運ばれて来た。
ええと寿司屋ではまず白身魚から頂くのがマナーなんだっけ。あたしが数少ない知識のストックを引っ張り出していると、生山が
「今日、君を呼び出した訳はさ」
と語り始めたので、あたしはハッとした。
そうだった。今日は生山に話があると呼び出されたのだった。寿司屋に来てすっかり舞い上がってしまっていたあたしは、反省しながら「うん」と相槌を打った。
「君が今日、何か誤解をしたんじゃないかと気になってさ」
「誤解って？」
「いやあの美容院に、あの時の写真の子がいたでしょ？」
やはりその話か。あたしは我が意を得たりと思ったけれど、素知らぬ顔をしながらあたしのおちょこにポン酒を注ぐ生山を眺めていた。羅馬はこういったことをしてくれない。何だかレディーとして扱われているみたいで心地好い。
あたしは満足しながら
「ああ、しーちゃんていう子ね」
と答えおちょこに口をつけた。
ポン酒なんて、子供の頃に母親に戯れに飲まされて以来だったけれど案外美味しかった。子供の頃は何てまずいんだろうと一口でリタイアしたというのに。あたしは大人になったということだろうか。それとも単に酒の銘柄の問題だろうか。
「あの子のこと、君が誤解したんじゃないかと思ってさ」
「どういう誤解？」
「君はあの子と俺の関係を、どう思った？」
ぐむむ。逆に質問されてしまった。生山はちょっとずるい奴かも知れない。
あたしは

「さあ、付き合ってるのかも知れないし、別れたのかも知れないし、友達かも知れないし」
　と興味無さそうに答え寿司を頬張った。美味い。回転を止めると寿司はこうも味を増すものなのか。
「あの子と俺が付き合ってるんじゃないかとか、君が誤解することが俺は嫌でさ」
「実際のところは？」
「付き合ったこともなければ付き合いたいと思ったこともない。一度飲み会を開いてもらったことがあるだけだ。あの写真はその時あの子の友達が撮ったんだ」
　そう言われてみればあの写真の背景は、カラオケボックスのルーム内みたいな感じだったなあとあたしは思い出した。しかし飲めないのに飲み会とは……。いや飲まなくても飲み会に参加することはできる。しかし…。
　あたしは腑に落ちない思いで
「ふうん。何人かで飲み会したのにツーショット写真をねえ」
　とつぶやきまたおちょこに口をつけた。ポン酒って強いって聞いていたけど何だか回りは遅いみたい。飲んでも飲んでも陽気になれない不思議なお酒だ。
　あたしが手酌でどんどん飲み始める様に目を見張りつつ生山は
「あれは何枚も撮った内の一枚なんだよ。俺はあの子とは一回飲み会をやっただけで、あとは美容院のスタッフと客っていう関係でしかないんだ」
　と言い張った。しーちゃんとの関係を懸命に否定する生山は、見ていて好ましかった。
「じゃあ何であの写真を、しおりに使ったの？」
「あれは本を読んでた時に、たまたま手近にあの写真があったから」
「ホントかなあ？　お気に入りの写真だったからしおりにしたんじゃないのお？」
　しゃべっていながら何だか頭が、天井に引っ張られていくような

感覚になった。何だろ、この感覚。これがポン酒の酔い？　今まで体験したことの無い酔いの感覚。ポン酒って不思議なお酒。
突然絡みだしたあたしに、生山は表情を硬くしながら
「大事な写真だったらアルバムに入れとくよ。しおりになんかしたら曲がっちゃうじゃん。挟んだの忘れたまま図書館に返さないって。その後、写真だって捨てたの見てたでしょ？」
とあたしをなだめ始めた。
はて、あたしはどうしてなだめられているんだろうか？
「写真捨てたのは失恋したからでしょ。しーちゃんのこと好きだったんでしょ」
「違う」
「んーじゃあ生山さんが言ったことが全部本当だとしてえ、どうしてそれをわざわざあたしに言うの？　こんな急に呼び出してまでどうしてあたしに説明するの？」
そう尋ねながらあたしはしまったと思っていた。生山が他の女との関係をわざわざ否定する席を設けたということは、あたしに好意を寄せているからに決まっている。だが今ここでそれを明かさせるのは全く得策ではなかった。
生山とはまだ会ってから日が浅い。生山があたしに好意を抱いていたとしてもまだその感情は確定的なものではないだろう。その段階で今の気持ちを表明させたとしても何の意味も無い。それなのにあたしはなぜそんなことを口走ってしまったんだろうか。酔いのせいか。慣れないポン酒を飲んだせいか。
あたしが唇を噛んでいると、生山は突然すねた口調で
「そんなこと、俺にも分からないよ」
とそっぽを向いた。
「自分でもよく分からないけど、君には誤解されたくないと思ったんだ。俺は今フリーだし美容院の子とも全然特別な関係に無い。その事実を君に伝えたいと思ったんだ」
まるで正式な恋の告白をしているかのように、ぎこちなく伝える

生山を見て、あたしはやっぱりあんな質問をしなければ良かったと思った。ここまで言われてしまったらあたしは羅馬の存在を明かさなければならないじゃないか。
　あたしは酔った頭をひねり
「事実かあ。事実って難しいよね」
と何やら抽象的な物言いをした。「え？」と生山がこちらに顔を向けた。
「客観的な事実だけで言えばあたしは今彼氏がいるけど、でも最近、彼と倦怠期かなあとか、自分は彼のことホントに好きなのかなあなんて思う側面もあって。そういう側面も事実と言えば事実じゃない？」
「まあね」
「だからいっそのこと生山さんみたいにフリーになって、シンプルな事実に自分を持ってっちゃいたいなあなんて、思ったりする自分もいるのよね。この気持ちもあたしにとっての事実だし」
　実は体を求め過ぎる羅馬に嫌気が差して、別れが頭をよぎったこともある。けれどあたしは羅馬の他に二人しか男を知らない。一人はセックスに淡白だった代わりに四股をかけていて、もう一人はセックスがあまり好きではないと言っていた。
　その男は二十六にもなって
「お母さんが心配するから」
　という理由で外泊をしないような男だったから、ひょっとしたら彼のマザコンが淡白の理由だったのかも知れない。
　ということは、よそで処理をしていなければ、あるいはマザコンでなければ、二十代の恋人の性欲というものはこういうものなのかも知れないとも思う。
　そう考えるとあたしは、羅馬との別れを本気で願う訳にはいかなかった。だからあたしが羅馬との別れを一瞬思い描いたことは事実だけれどこんな風に口にしてしまうと何だか意味合いが全然違う。
　そもそも倦怠期にしたって羅馬が一人で陥っているだけなのに、

あんな言い方をしたら、あたかもあたしが倦怠感を抱いているかのようだ。それなのになぜあたしは誤解を与えるような表現をするのか。酔いのせいか。慣れないポン酒があたしに戯言を言わせているのか。

何となく罪悪感に駆られていると、生山は食べ終えた寿司の皿をテーブルの隅に押しやりながら

「聞きたくなかったなあ。そんな話」

と言いながら胸ポケットから煙草を取り出した。あたしはどういう意味かと訝りながら、生山を見詰めた。

「ぶっちゃけ俺は君のこと好きになりかけてたんだよね。でも彼氏がいるって言うんなら仕方が無い。涙を飲んで諦めるけど、その彼氏との仲が上手くいってないなんて聞かされたら、自分の気持ちをどう処理していいか分からなくなるよ」

「じゃあ友達になろうよ。あたしも生山さんのこと好きだし」

「その好きっていうのは、恋愛感情も含まれてるのかなあ」

なかなか追及の鋭い男だとあたしは辟易したけれど、こんな風に熱心に口説かれるのは悪くない気分だった。しかも生山の口説き方は暑苦しくなくていい。

ずっとそんな風に中途半端な気持ちを、あたしに対して持っていてよ。あたしは身勝手な願望を感じながら

「分かんないよ。そんなの。まだ会ったばっかだし。でも『好きになりかけてた』ってセリフは素直に嬉しかったよ」

と答えた。

「でも友達付き合いしてる内に、君のことますます好きになったら辛いんだろうなあ」

「あたしの正体が分かってく中で気持ち冷めるかもよ。まあでも無理強いはしないけどね」

「そうは言ったってこの流れじゃ、友達になるしかないんだろうなあ。俺、君のこと気に入っちゃったし」

そう言うと、生山は煙草を一口吸い

「あー、全く惚れてる方は立場弱いよなあ」
と嘆いてみせた。この間は気付かなかったけれど煙草の銘柄はラッキーストライクだった。銘柄に反してストライクを打てなかった生山は、何だか気の毒な感じすらした。
けれどそれはあたしがいけないのだ。よく分からないけれどあたしがいけないのだ。そう思いながらあたしは紫煙を吐き出す生山を眺めていた。

その晩以降、生山とは頻繁に会うようになった。なぜ頻繁に会えたかといえば羅馬からあまり誘いが来ないからだ。
週末のどちらか一日はあたしと会う約束を取り付けるけれど、平日はやれ宿直だとか友達と飲みに行くとかで、全然あたしと会おうとしない。同棲を持ちかけてきたくらいだからてっきり羅馬はあたしと共に過ごす時間を願い始めたのかと思っていたが、どうやらその予想は外れたようだ。
ひょっとしたら羅馬は友達と会うことを優先するために、あたしに同棲話を持ちかけてきたんじゃないだろうかと思い当たった。同棲をすれば約束をしなくてもあたしに会うことができる。羅馬はあたしと会う約束をすることが億劫になり始めたのかも知れない。
そんな理由であたしに同棲を求めた羅馬に腹が立ち、あたしはできうる限り生山と会うようになった。生山は必ずしもあたしを高級な店に連れ出す訳でもなく、カジュアルなレストランにも連れて行ったが、三回に一回くらいはフレンチレストランだの高級中華料理店だのにあたしを連れ回した。
この不況下にリッチな飲食店でおごられることは、素直に嬉しかった。羅馬と外食をする際はせいぜいファミレスか定食屋に連れて行かれるくらいだ。
また生山とは時折週末のデートをした。忍野八海を散策したり、

山中湖美術館でブラックの絵を鑑賞したり、天下茶屋で太宰治が使っていたという机や火鉢を見物したりした。二十二歳になって尚、太宰はしかの患者である生山は嬉々として太宰の魅力を語った。

そんな中であたしはどんどん生山に傾倒していった。頻繁に「会いたい」と連絡を寄越し、上手いメシをおごり楽しい話題を繰り広げ色々な場所へ案内してくれる。そして彼氏のいるあたしの状況を理解し、羅馬から電話がかかってきた際には嫌な顔一つせず通話が終わるのを待っている。

あたしはこれまで、親しい男友達というものを持ったことが無かった。会社の男連中の中にはプライベートな付き合いがある人もいるけれどマンツーマンで会う仲の人はいない。他に誘いをかけてくる男もあたしが彼氏持ちだと知るや否や踵を返してしまう。

そんな中で生山は理想的な男友達だった。けれど彼と会う度に確実にあたしの恋愛感情は刺激されるのだった。

そんな折せり姉が久し振りにあたしの部屋を訪れた。英語のロゴ入りのグリーンのTシャツに、白地にベージュのストライプが入ったスカートを合わせ、手には鮭の味噌焼きときんぴらごぼうの入ったタッパーを持っている。せり姉の働いている店はスタイリストがついているため、彼女の普段の装いはいつも素人のようだ。

せり姉はぐるりと室内を見渡すと

「随分、荒れてるねえ」

と呆れた声を出した。事実その通りだった。

玄関には靴が散乱し洗濯機からは洗濯物がはみ出している。流し台には使用後の食器が溜まり、キッチンの床には買ったままましまわれていない缶詰だの洗剤だのが直置きされたままだ。

「最近、ちょっと忙しくてね」

あたしは言い訳しながら、とりあえず座椅子の上に脱ぎっぱなしになっていたパジャマを畳んでベッドの上に置いた。生山と会うようになってから自分の時間が取れず、部屋が散らかり始めていることにあたしは気づいていた。

生山との逢瀬以外にも羅馬とも会えば友達とも会っている。すっかり忙しくなってしまったあたしは、住まいを片付けることを放棄し始めていたのだ。
「なあに？　仕事が忙しいの？」
「ううん、不況のあおりで仕事は暇」
「じゃあ何でまた、こんなに散らかしてる訳」
せり姉はタッパーを流し台の上に置きながら尋ねた。あたしはそれを冷蔵庫にしまいながら
「この前話した生山さんと最近しょっちゅう会っててさ。この有様」
と告げるとそれまでの一連の話を説明した。
お茶を入れようかと思ったけれど、キッチンが散らかっていて使い辛く、あたしは冷蔵庫から麦茶を出して注ぐとせり姉の座る座椅子の前のテーブルにグラスを置いた。
せり姉はグラスから麦茶をあおると
「何かイッパイイッパイじゃん。冴ちゃん」
とつぶやいた。あたしは「そうなの」と答えた。
「こんなに、うちん中ぐちゃぐちゃなのに、生山さんに会いたくてたまんないの。生山さんと会ってると楽しくてたまんないの」
「生山さんに、惚れたってこと？」
「正直言って、恋愛感情は持ってる」
あたしは立ち上がると冷蔵庫に向かい、麦茶の入ったポットをテーブルに置いた。せり姉は酒に強いが飲み物にも強い。水分をガバガバとっては始終体のむくみを訴えている。むくみの解消には水分をとるといいと以前何かで読んだけれど、せり姉の場合は明らかに水分のとりすぎだ。
麦茶にはむくみ解消の効果があると聞いたことがあるけれど、せり姉に対して、どれだけの効果を発揮してくれることやらと考えていると、せり姉はポットから麦茶を注ぎながら
「じゃあ羅馬君は、どうすんの」
と尋ねてきた。

「でもあたし羅馬のことも好きだし、今どっちかを選ぶなんてできないんだよね」
「だって羅馬君に、同棲持ちかけられたことが嫌なんでしょ？」
「確かにそうだけど、でもだからといって羅馬と別れて生山さんと付き合うことがいいことなのかどうかも分かんなくて。だって宝飾関係なんて今、下り坂でしょ。県立宝石専門学校だって不況のあおりで入学者めちゃくちゃ少なかったらしいし。そんな状況で金使い荒い生山さん見てると、何か不安な感じがして」
　実際あたしの恋心にストッパーをかけているのは、その事実だといってもいい。聞けば生山の勤務する会社は社員が五人しかいないという。そんな小さな会社、宝飾品というぜいたく品を扱う会社がこの不況下に、果たして生山にどれくらいの給料を払っているのかとあたしは疑問だった。
　生山はひょっとしたら金銭感覚の欠如した男なのかも知れない。そんな男の彼女になることはあたしには不安があった。
　その時せり姉がバージニアを取り出しながら
「複数の男を好きで選べない時っていうのは、結局どの男のことも本気で好きじゃないんだよ」
　と言った。
　あたしは戸棚から灰皿を出しながら「そんなもん？」と尋ねた。あたしは煙草を吸わないが、せり姉が吸うために部屋には灰皿を用意してある。せり姉はバージニアと灰皿を持ったまま窓を開けてベランダに出た。
　ぜんそく持ちのあたしを気遣ってせり姉は煙草を外で吸う。ただ空気の綺麗な地方に来たおかげで、あたしのぜんそくはだいぶよくなっていた。だから目の前で喫煙されても構わないのだに、せり姉は断固として蛍族になるのだ。
　今日は宵を迎えても昼間の蒸し暑さがなごっていたから、窓を開け外の空気を取り込むのは気持ちがよかった。窓の外から夜の匂いがする。ベランダでかがみ込むせり姉から夜の匂いがする。微かに

流れてくる紫煙から夜の匂いがする。
夜の匂いに囲まれながら、せり姉は
「そんなもんだよ。わたしの経験則ではね」
と答え煙を吐いた。
経験則。五歳年上の従姉。水商売を生業とする夜の匂いのする女。
あたしはせり姉のセリフに、何となく説得力を感じて
「じゃああたしは、どっちのことも本当には好きじゃないってこと？」
と尋ねた。自分ではどちらも好きだと思っていたのにそれではあべこべだ。
「多分ね」
「でもせり姉の言うことがホントだとしてもさ、今のあたしには本気で好きになれる男がいないってことだから、本気じゃない好きの羅馬と生山さんが存在する限り、やっぱ両方と関わっちゃうじゃん。二人ともあたしと関わろうとしてくる訳だし」
「そう？　二人の男と同時進行なんて大変じゃない？　わたしだったらやだな」
せり姉の言葉にあたしは思わずうつむいた。テーブルの下に読みかけの『村上龍料理小説集』が転がっている。「感想を聞かせて欲しい」と貸されたというのに、二人の男との逢瀬に忙しく本を読む暇も無い自分。散らかった部屋の住人。
バツが悪くなったあたしは
「同時進行じゃないよ。羅馬とは付き合ってるけど生山さんとは友達だもん」
とどうでもいい言い訳をした。
あたしは二股をかけている訳ではないという理屈が、あたしにとって自分への言い訳でもあるのだった。
「だって羅馬君は、生山さんの存在知ってるの」
「知らないけど」
「隠してるんでしょ？　そりゃそうだよね。生山さんに恋愛感情持

ってる訳だし」
　せり姉は顔をこちらに向けずに外を見たままつぶやいた。せり姉の肩越しに紫煙が夜空へ流れ瞬く星々を汚していくのが見えた。つまらない景色。そんなつまらない景色をせり姉はずっと眺めている。多分ずるいあたしの顔を見たくないんだろう。こんなあたしのことをせり姉は嫌いなんだろう。
　あたしは思わず
「だってしょうがないじゃん。二人とも好きなのに二人ともあたしの思い通りにならないんだもん。羅馬は同棲したいとか言うし、生山さんのことはまだ会ったばっかで分かんないのにあたしのこと好きとか言うし」
　と小さく怒鳴った。
　男の性急さというものは分かっていたつもりだったけれど、あたしは二人が、あたしとの間合いを詰めようとしてきていることが息苦しかった。あたしの好まない方法で詰めようとしてきていることが煩わしかった。
「それってわたしの客に対する感情みたい。連絡先を聞かれたくないのに聞かれる。メールが来たら面倒なのにメールが来る。電話よりせめてメールにして欲しいのに電話が来る。そんなに近づいて来ないでよ。うっとうしいのよっていう感覚みたい」
「違うの。二人の近づき方が嫌なの。羅馬にはもっと会ってあたしと沢山話をして欲しいの。生山さんのことはまだ分からないから考える時間が欲しいの」
「何を考えるの。どっちみち生山さんの金遣いの荒さが嫌なくせに」
　せり姉はバージニアを揉み消すと、立ち上がってあたしの顔を見た。細く長い指がカラカラと窓を閉める。いつの間にか部屋中には冷たい空気が充満していた。
　あたしはその空気に体を晒しながら
「でも羅馬だって倹約家じゃないよ。パチンコとか結構するし。たまたま勝つことが多いからじゃんじゃん飲みにも行けてるけど、で

もギャンブルって時の運でしょ？　もしツキが無くなっちゃったらこの人の財布はどうなっちゃうんだろうって思うし」
と反論した。
考えてみれば、あたしが今好きな男は二人とも金銭的にルーズという共通の欠点を抱えているのだ。全く何ていうことだろう。初めは羅馬への物足りなさが、生山への傾倒を起こしていると思っていたのに、その生山も金銭感覚が尋常ではないなんて。あたしはすっかり訳が分からなくなり頭の中がぐるぐるしてきた。
するとせり姉は
「羅馬君にツキが無くなって、羅馬君が収入の範囲内でお金使うようになれば冴ちゃんは羅馬君のことを好きでいられる訳？」
と尋ねた。
思わぬせり姉の一言にあたしはあっと思った。ツキから見放された羅馬のことを、今と同じくらい好きでい続けられる自信があたしには無かった。あたしは強い男が好きだ。その強さには羅馬のバク才も含まれているのかも知れない。
あたしはギャンブルが嫌いなのに一体どうしたことだろう。ギャンブルをする羅馬を疎みながら、彼のツキには好感を持っている自分。矛盾していると思った。あたしはせり姉の言う通り羅馬のことを本当に好きではないのかも知れないと思った。そして金遣いの荒い生山のことも。
あたしは大きく溜め息を吐くと「分かんないよ」と答えた。
「羅馬がツキから見放されたら、それは今までの羅馬じゃないもん。でも現時点で羅馬はツイてる。今の羅馬への想いしかあたしには分かんないよ。生山さんに対してだって今の生山さんに対しての気持ちしかあたしには分かんないよ」
「富める時も貧しき時も、変わらぬ愛を誓えるのが本当の愛なんじゃないの」
「せり姉はクリスチャンじゃないじゃないのに、何でそんなこと言うの」

あたしは少し憤慨していた。クリスチャンじゃないのにキリスト教式の結婚式で使われる文句を引用するせり姉。クリスチャンじゃないのにキリスト教式の結婚式を挙げたがる世間の女たち。そういうものが嫌だった。

いずれ結婚をする日が来るとしても、あたしは決してキリスト教式では挙げないし神前式もしないつもりだ。人前式があたしには丁度いい。信仰を持っていないのに宗教の形式だけ借りるなんて馬鹿馬鹿しいことだと思う。

軽くせり姉をにらむあたしに、せり姉は

「クリスチャンじゃなくたって、キリスト教の教義の中になるほどなあと思うものがあるのは別に不思議じゃないでしょ」

と諭すように言った。

そう言われてしまうとそんな気もする。何だか訳が分からなくなってきた。つい先程自分が発した言葉にさえ自信が持てない。

あたしは

「もう何だかよく分かんない。混乱しちゃう」

と頭を抱えた。

強いかも知れない羅馬。その羅馬と正反対だと思っていたのに共通点を持つ生山。元々羅馬とはかんばせが似ている生山。似ているような違うような二人。水商売をしているくせに案外保守的なせり姉。散らかった部屋。

あたしが頭の中をぐるぐるさせていると、せり姉は憐れむような表情で

「家ん中が散らかってるから、頭の中も散らかるんだよ」

と言った。

「そういうもん？」

「家の状態は、その人の心の中を表すらしいよ」

ならばあたしの心の中は惨憺たる有様だということか。あたしが暗い目をして部屋の中を見渡すと、せり姉は

「じゃあわたし、そろそろ出勤だから」

と手をひらひらさせて、出て行った。
あたしはせり姉の後姿を見送ると、のろのろと立ち上がり洗濯機の前に立った。まずは洗濯から始めようと思った。
洗濯機のふたを開けるとビームスのシャツが出てきた。以前バーゲンで買ったものだ。そして昨夜、生山とのデートで身に着けたもの。
ふと、このシャツはしばらく生山の前では着られないなと思った。生山の前ではなるべく同じ格好をしたくない。自分のワードローブを全開して様々な装いをして色んなあたしを見て欲しい。
そのためには生山と会った際に身に着けていた服を、メモしておくべきじゃないだろうかとあたしは思い当たった。あたしは洗濯を放り出すと、バッグから手帳を取り出し生山と会った全ての日の記憶を手繰り始めた。初めて会った日に自分は何を着ていたか。次に会った日に自分は何を着ていたか。
楽しく回想を始めていると羅馬から電話がかかってきた。今週は土曜日に会おうと言う。
どうして最近あたしとは週末しか会ってくれないんだろうと思った。あたしはもっと羅馬に会いたいのに。会う日が少なければ、結局その日はセックスと食事だけをして過ごすことになる。
あたしはもっと羅馬とあちこちに出かけたかった。買物をしたりさくらんぼ狩に行ったりすずらん祭りに行ったりしてみたかった。そしてそういう体験を通して羅馬と語り合ってみたかった。
羅馬との通話中、あたしは心の中で
「ねえあたし、もっと羅馬に会いたいんだけど」
というセリフを五回練習した。けれど結局、勇気が無くて言えなかった。
最近羅馬はあたしが部屋を片付けないので機嫌が悪い。遊びに行く暇があるなら掃除をしろと言われるのが関の山だと思った。けれどあたしが部屋を散らかしているのは羅馬のせいなのだ。羅馬があたしをもっと構ってくれたら、あたしは生山と会ったりしないから

部屋は片付くのだ。
何だか悪循環だと思った。こんな悪循環を生み出させあたしに隠し事をさせる羅馬をあたしは憎んだ。

こんな状態をいつまでも続けていられないことは分かっていた。生山はあたしが羅馬と別れることを望んでいるし、こんな中途半端な関係のままいつまでも生山をキープできるはずもない。
この間は生山にアウディーの中で
「ごめん。ちょっとだけ我慢して」
と言われ抱きしめられた。彼氏のいる身で他の男に抱きしめられるあたしを案じるかのような言葉にあたしは申し訳なさを感じた。
謝らなければいけないのはあたしの方だ。生山に対しても。羅馬に対しても。あたしはそろそろ決断しなければいけない。何かきっかけが欲しいと思った。
そのきっかけは思わぬところで訪れた。生山と出かけた居酒屋の駐車場で羅馬と鉢合わせたのだ。生山は酒が飲めないためこれまでは二人で居酒屋へ足を運んだことはなかった。それにも関わらず居酒屋に向かったのはお互い食べたい物が決まらなかったからだ。
居酒屋ならメニューが豊富だからその中から適当に選べばいい。そんな安易な気持ちで訪れた居酒屋の駐車場で、生山のアウディーから降りた途端あたしは男友達とやって来た羅馬と対面した。
今夜は初夏の割に冷え込むというのに、カーキ色の半袖シャツをまとった羅馬は、こちらにつかつかと歩み寄ると、「どういうことだよ」と凄みを聞かせた声であたしに尋ね、あたしと生山の顔を交互に見比べた。相変わらず黒い長袖シャツを着込んでいた生山はバツの悪そうな顔で黙り込んでいた。
「どういうことって、この人は友達だよ」
「友達だからって、お前は男と二人で出かけるのか」

「友達と二人で出かけるのって、いけないこと？」
あたしが反発すると羅馬は
「お前がそのつもりじゃ、いいよ」
と立ち去ろうとした。その時半袖シャツから伸びた羅馬の腕の筋肉が目に入りあたしは切ない気分になった。「いいよ」ってどういうこと？　あたしと別れるってこと？
その時あたしは痛切に、この人はあたしの彼氏なんだと思った。あのしなやかで力強い筋肉でベッドに押し倒される日常を、失ってしまうなんて嫌だと思った。
あたしは生山をその場に残すと羅馬の後を追った。
「ごめん。謝るから行かないで。男友達と二人で出かけることが羅馬にとってそんなに嫌なことだとは思ってなかったの」
下手に出たあたしに機嫌を直したのか、羅馬は
「じゃあ今から、俺のアパートに来いよ」
と言い放った。
あたしは一も二も無く承諾すると、生山に
「ごめん。そういうことだから」
と告げ、羅馬のキューブに乗り込んだ。
遠巻きに羅馬の友人たちがその様を見ていた。あたしは羅馬の友人たちには一通り紹介されている。羅馬に恥をかかせる訳にはいかなかったのだと思いつつ、生山には恥をかかせてしまったなと申し訳なく思った。
けれど仕方が無いのだ。羅馬はあたしの彼氏だけれど生山は違う。彼氏を優先することが当然のことなのだ。
何度も訪れた馴染み深いアパートの一室で、あたしは羅馬に抱かれた。その営みはいつもよりずっと激しく羅馬はあたしの唇に舌を差し入れると歯ぐきまでねっとりとなめまわし、あたしの瞼にまで何度もキスをした。
嫉妬がスパイスになったのだなと思いながら、あたしは羅馬を受け入れた。何にせよ愛されるということはいい。ヤキモチを焼かれ

る程にあたしは羅馬に愛されているのだから。
もう生山のことなどどうでもいいと思った。生山はスパイスだったのだ。それ以上のものには決してなり得ない。
けれど一戦交えた後、羅馬は執拗にあたしを責め立て始めた。どうやらセックスをしただけでは、羅馬の気持ちは満たされなかったらしい。あたしの気持ちは羅馬に戻ったというのに今になってもまだ生山の存在を悪し様に罵る羅馬にあたしはげんなりした。
多分、生山だったならあたしを責めたりしないだろう。生山は彼氏がいることを承知であたしと関わっていたのだから。そう思うと途端に羅馬が煩わしくてたまらなくなった。
あたしは
「だったら、もういいよ」
と告げると衣服を身に着けた。白いくしゅくしゅとしたワンピース。生山はこれを褒めてくれた。
「冴香ちゃんは顔が赤ちゃんぽいから、こういうベビー服みたいなのが似合うよね」
と笑った。赤ちゃん扱いされるのは心地好かった。山田詠美の小説に出てくる黒人たちが、女を「ベイビー」と呼んで口説く理由が分かる気がした。
ベイビー。ベイビー。赤ん坊になりたいと思った。赤ん坊になって何もかも許して欲しいと思った。生山なら許してくれる。きっと生山なら許してくれる。
「『もういい』って何がだよ」
背後で羅馬が憤っていた。けれどあたしはもう羅馬の顔を見たくなかった。
あたしは背を向けたまま
「男友達と二人で会うことが嫌だなんて聞いてなかった。でも今日、嫌だって言われたからあたしは謝ったのに、いつまでも怒られたらやってられない」
と言い放ち化粧を直して髪を整えた。

「ふざけんなよ、てめえ」
羅馬があたしの両肩をつかんだ。恐れと怒りがあたしの全身を貫いた。羅馬の腕の筋肉はこんな風にも使われてしまうんだと思った。もう無理だと感じた。この人とはやっていけない。生山の存在があろうとなかろうとこの人とは無理だったんだ。
「離してよ。もう無理なの。無理なの」
小さく叫びながら顔を背けると一瞬羅馬の手の力が緩んだ。あたしは慌てて羅馬から体を離すとバッグをつかんで玄関まで走った。
「冴香！」
「来ないで。もう嫌」
サンダルを突っかけるとあたしは外に飛び出した。「冴香！」再び羅馬の声が響いたけれどあたしは振り向かずに走り出した。生山に会いたいと思った。今ならまだ間に合う。あたしは生山のマンションに向かって走り出した。ここからならおそらく徒歩で三十分。走ればもっと早く着く。
夜の冷気の漂う道を駆けながら、あたしは羅馬が追って来ていないことを感じていた。無理も無い。羅馬は素っ裸だったのだから。けれどもし着衣していたのなら羅馬は追って来ただろうか。
居酒屋の駐車場で
「お前がそのつもりじゃ、いいよ」
と立ち去ろうとした羅馬の後姿が脳裏に浮かび上がった。どうしてあの時追ってしまったんだろう。羅馬はあの時あたしを捨てたのに。
あたしは夢中で住宅街を走り抜けた。途中ぽつんと現れた田んぼからカエルの鳴き声がした。ゲコゲコ。ゲコゲコ。あたしの耳に届くのはカエルの鳴き声だけ。携帯は鳴らない。羅馬はあたしを見限った。あたしにはもう生山しかいない。

さすがに走り詰めで疲れたあたしは、途中から歩きながら生山のマンションへ向かった。事前に電話を入れておこうかとも思ったけれど会わなければ想いが伝わらない気がしてひたすら歩いた。
ようやくマンションのエントランスが見え始めた時、あたしはいさかいの音を聞いた。よく見ると正面玄関の脇の植え込みの陰で女が二人取っ組み合いの喧嘩をしているところだった。
何事かと目を見張ると、女たちがしーちゃんと曽我の二人であることが分かった。なぜ彼女たちがと戸惑うあたしの耳に
「あんたなんか、生山さんにふさわしくないのよ」
と叫ぶしーちゃんのきんきん声が届いた。
普段はあんなに可愛らしい声でしゃべるしーちゃんが、こんな声をあげるなんて。あたしは思わず植え込みの反対側の陰にしゃがみ込むと一体何が起きたのだろうとつかみ合う二人の女を眺めた。
振り乱した髪。怒りに歪む顔。乱れた衣服。もつれ合う二つのかたまり。踏みつぶされたポピーの花。夜の闇。怖い。
その時突然誰かに肩を抱かれ、あたしは思わず悲鳴をあげそうになった。けれどそれより一瞬早く相手は「しっ」とささやいてあたしの唇に人差し指をあてがった。恐る恐る横顔を見詰めた。生山だった。
あたしは安堵と高揚の入り混じった気分で黙り込んだ。もう羅馬のものではないあたし。生山が自由にできる体が今、彼に抱かれている。生山は受け入れてくれている。居酒屋の駐車場で彼を捨てて立ち去ったあたしを受け入れてくれている。けれど今、目の前で繰り広げられているこの光景は一体何を意味する？
「俺あの二人に、『好きだ』とか『付き合おう』とか何にも言ってないんだぜ。それなのにあんな騒ぎ起こされちゃ引くよな」
ささやくような声がぬるぬるとあたしの耳元に入ってきた。口元に薄笑いを浮かべている生山。自分を巡って争いを繰り広げている女たちを嘲笑している。何て冷たい男。そんな男に惚れられたあたし。

晴れがましい。
あたしは共犯者のような気分になって、しばし揉み合う女たちを観察した。可哀想。馬鹿みたい。気の毒だ。信じられない。
相反する感情になぶられながら
「あたしさっき、彼氏と別れてきたの」
とつぶやいた。生山は喜色に満ちた笑みを浮かべ
「裏口から、中に入ろう」
と立ち上がった。
生山の誘導で裏口からマンションの中に入り、生山の部屋のドアを開けた。この部屋に入るのは初めてだ。あたしは興味深く中を見渡したが幾つかのドアが閉じられた廊下が見えるだけで、生山の生活を伺い知ることはできなかった。
生山は奥のドアを開けあたしを招じ入れた。そこはクローゼットとダブルベッドとエアコンだけの簡素な部屋だった。
その部屋のドアを閉めると、生山はすぐにあたしを抱きすくめ唇を寄せた。あたしは顔を背けると
「待って。先に教えて。あの二人はどうして生山さんのマンションを知ってるの？」
と尋ねた。
「前に二人で、遊びに来たことがあるんだよ」
「いつ？」
「二、三日前かな」
「どうして？」
「遊びに来たいって言うからさ」
「二人が生山さんのこと好きだって、生山さん知ってたの？」
そんな問答を交わしている内に、白いワンピースは剥ぎ取られあたしの体はベッドの上に押し倒されていた。
ふと枕元に目をやると、アーヴィン・ウェルシュ著の『トレイン

スポッティング』が転がっているのが見えた。何度も読み返したらしく本には手垢が付いている。おそらくあたしに貸してくれた『村上龍料理小説集』よりずっと、そこには濃密な生山の姿が記されているのだろうと思った。

こんな性的な匂いの中で、枕元の本に興味を惹かれ始めたあたしに対し、生山は

「二人の気持ちは知ってたよ。でもそんなもん俺には関係無い。俺には冴香がいるんだから」

とあたしの上に覆いかぶさった。

その瞬間あたしは『トレインスポッティング』のことを忘れた。

生山はあたしの体を覆ったまま、丁寧にキスをした。さらりとしていて気持ちのいい唇だった。羅馬のように唇が痛くなるような激しさはないというのに情熱的で、あたしの心と体は、とろんと溶けた。

十本の指が下着の上からあたしの体をまさぐり始めた。下着の上から愛撫されるのは心地好い。長くゆっくり時間をかけてあたしを抱いてくれるのだと思うと興奮する。溶け出した心と体が確かな温度を持って燃え始めるのを感じる。

けれどあたしの下着は先程の羅馬とのセックスで汚れていた。男と寝て汚れた下着のまま生山に抱かれるあたし。シャワーも浴びずに抱かれるあたし。男と別れたその足で新たな男の元に飛び込みベッドになだれ込むあたし。

正面玄関の脇の植え込みの陰で、二人はまだ戦っているのだろうか。二人の女が生山を巡ってつかみ合っている最中に、当の生山にベッドで愉楽を与えられている事実にあたしは歓喜の声を上げた。

背筋の性感帯にするすると指を流され、あえぐ今のあたしを羅馬は想像しているだろうか。想像して欲しいと思った。今どれだけあたしが気持ちいいか羅馬に知って欲しいと思った。

「やっと俺のもんになりやがった。散々手間かけさせやがって」

生山はそうつぶやくと、ブラジャーの上から確実に突起のありか

を見極めそこをピンポイントに刺激してきた。早くブラを外して欲しい。でも恥ずかしいから外さないで欲しい。相反する感情に波打たれている内にブラジャーはずり上げられ、あたしの乳房は丸見えになった。

見ないで欲しい。見て欲しい。じかに触って欲しい。まだ触らないで欲しい。心の準備ができないまま、ブラからこぼれ落ちた乳房に生山の手が伸びた。恥ずかしくて死んでしまいそう。快楽が強くて死んでしまいそう。

「灯りを消して。お願い」

あたしの要望に、生山はすぐさま部屋の照明を落とした。

窓から差し込む街灯が部屋をほの白く照らしている。どうしたってあたしのシルエットは生山の目に入ってしまうだろう。恥ずかしい。そして多分あたしはいけないことをしている。けれど恥ずかしくていけないことをしていることが、こんなにも愉悦をあたしに与えてくれるなんて。

あたしはもっと恥ずかしくなりたくて、もっと罪悪感を覚えたくて、目を開くと生山の顔を見詰めた。暗がりで見詰めた生山の顔は一瞬羅馬の顔に見えた。ああ羅馬。もうあなたに抱かれることはないと思っていたのにこんな場であなたと遭遇するなんて。

まるで羅馬に受け入れられて、セックスをしているような気分になった。セックスの手順はまるで違うのに羅馬と生山の二人に抱かれているような気分になった。

羅馬。生山さん。羅馬。生山さん。とうとうあたしを冴香という呼び捨てで共に呼ぶようになった二人。二人で抱いて。二人で抱いて頂戴。あたしの体は生山さんのものになったけれどあたしの心は二人のものよ。

生山に初めて抱かれているというのに、あたしの心はすでに生山を裏切っていた。あたしは皆を裏切っていた。生山を羅馬をしーちゃんを曽我をそしてせり姉を。

背徳感に震えながらあたしは生山にしがみついた。この人はあた

しの悪い引き出しを開ける。それこそ本当にあたしを裸にしてしまう。晒される。晒して。自意識も良心も何もかも取っ払ってしまって。

生山が入って来た時あたしは雄たけびを上げた。それは獣のような声だった。今までベッドの上でこんなわめき声を出したことは無い。嫌だと思った。こんな声は色っぽくない。もっと可愛らしい声を出したい。

けれどあたしは騒ぎ続けた。快楽が強すぎて苦痛だった。助けて欲しいと思った。何もかもを晒して自意識を取っ払うとこんな恐ろしい声が出てしまうのかと思った。生山に嫌われやしないかと不安だった。

しかし生山は果てた後、さも愛しげにあたしの髪を撫でた。おそらく慣れているのだ。叫び狂う女に慣れているのだ。ひょっとしたら自分を巡って金切り声を上げて乱闘する女にも。

あたしはぜいぜいと息を吐いた。漂う空気が冷たい。ふとクーラーが作動していることに気付いた。今夜は気温が低いのに生山はクーラーを入れているのか。あたしは暑がりな生山に失望しながら

「ごめん。エアコン切ってもらっていい？」

と尋ねた。

「あたしぜんそく持ちで、冷たい空気が辛いの」

「いいよ。今夜は泊まっていきなよ」

生山はエアコンを切ると、部屋の照明を点けクローゼットからジャージを出して寄越してきた。あたしはそれを着ると再びベッドに潜り込んだ。ジャージとシーツと枕元に転がる『トレインスポッティング』から生山の匂いがした。

枕に頬を押し付けながら、これからあたしはこの匂いに馴染んでいくんだなと思った。二人の男に抱かれながらシャワーも浴びずに眠るあたし。不潔だと思った。けれどその不潔さがあたしには心地好かった。不潔でふしだらな今のあたし。堕ちていくことは何て気持ちがいいんだろう。

ふと生山は、あたしにまとわりついていたはずの羅馬の匂いに気付かなかったのだろうかと疑問を持った。煙草のせいで嗅覚が鈍っているんだろうか。それとも男というものは案外匂いに鈍感なのか。
ちょろいものだと思いながらあたしはまぶたを閉じた。生山が照明を消し、横向きに寝そべるあたしを後ろから抱きしめた。首筋にキスを受けながらあたしは、乱闘していた二人は今頃どうしているのだろうと考え、そして眠りについた。

胸の息苦しさと騒音で目が覚めた。まだ二時間と眠っていない。ふとエアコンが作動していることに気付いた。エアコンは止めてくれと頼んだはずなのに。あたしは部屋の照明を点けると慌ててエアコンのスイッチを切った。照明がこうこうと部屋の中を照らしているというのに隣の生山は高いびきで眠っている。
その傍らに空の薬剤が転がっているのが見えた。あたしは薬剤を拾い上げるとその名称を確認した。インプロメン、マイスリー、アモバン、レンドルミン、ハルシオン。聞いたことのない薬剤ばかりだったためあたしはケイタイでとりあえずインプロメンを検索した。インプロメンは睡眠剤だった。
ということはおそらく他の薬剤も睡眠剤だろうと、あたしは考えた。全部を調べてもよかったのだけど胸が苦しくてそんなことをしている場合ではなかった。インプロメンだけで充分だ。生山はこれらを服用しているため耳障りないびきをかいており、これらを服用しているため熟睡して目を覚まさないのだ。
自分も不眠症を患っているくせに、ぜんそくのあたしとの約束を破り惰眠をむさぼる生山に腹が立った。だらしなく口を開けゴウゴウといびきをかき続ける生山。昼間見る姿とは似ても似つかない。何だか生山が醜悪な生き物に見えた。
一瞬生山をたたき起こし文句を言ってやろうかと思ったけれど、

胸からひゅうひゅうと音がして言葉を発するのが億劫だった。この部屋を出なければと思った。外の暖かい空気を吸い込みたい。
急いでワンピースに着替えると、あたしはバッグを持ってマンションの外に出た。初夏の夜の空気が束の間の人心地をつけてくれた。けれど今夜は初夏にしては気温が低い。胸苦しさは止まらない。
あたしは胸を押さえながら、シンと静まり返ったエントランスを抜けた。当然のことながらそこにはもう曽我としーちゃんの姿は無く踏み荒らされたポピーの花だけが先程の乱闘の記憶を留めていた。
それを認めるとあたしは自宅に向けて早足で歩き始めた。早くホクナリンテープを貼らなくては。それともメプチンエアーを使った方がいいだろうか。
夜道をとぼとぼと歩きながらあたしは不安でいっぱいだった。羅馬を捨ててまで付き合おうと思った生山に、こんな目に遭わされるとは。乱闘していた女たちもすっかり姿を消したというのにあたしはこんな夜更けに一体何をしているんだろう。
ようやくアパートにたどり着きメプチンエアーを吸ったのに、胸はいつまでもぜいぜいひゅうひゅうと音を立てていた。誰かに背中をさすって欲しいと思った。
ふと東京の両親のことを思い出した。けれど彼らがあたしのために夜中に駆けつけてくれるとは思わない。父親は空気のよい地方に転勤することも可能だったのに、東京本社に留まりたいがためにあたしのぜんそくを無視した人なのだ。
筆舌に尽くしがたい孤独があたしを襲った。あたしが今までやっていたことは何だったのだろうと思った。自分勝手な恋情であたしを飼い殺しにしていた羅馬。高額な食事はおごっても約束を破りあたしにぜんそく発作を起こさせた生山。エントランス脇の植え込みの陰で取っ組み合いの喧嘩をしていた女たち。
結局二人ともあたしを愛していなかったのだと思った。その二人と関わり続けた結果がこれか。散らかった部屋とぜんそくの発作。これなのか。あたしが求めていたものは。

ぜんそくの発作が起きたの。助けて。
震える指でせり姉にメールを送った。せり姉は朝五時まで働いているから今頃はまだ接客中だろう。仕事を放り出して来てくれるかは分からない。けれど今はせり姉だけがあたしの頼みの綱だった。
玄関のブザーが鳴ったのはそれから三十分後のことだった。仕事場からそのまま現れたのだろう。盛り上がった髪とどぎついメイクでせり姉は部屋に入って来た。
「吸引薬は、使ったの？」
「うん。でも胸のぜいぜいが取れなくて」
「横になりなよ。背中をさすってあげる」
せり姉に背中をさすられてようやく安らいだあたしは、知らぬ間に涙をこぼしていた。あたしは涙声で
「せり姉、仕事は？」
と尋ねた。
「今夜は客も少なかったし、早引けして来た」
「でもいれば、時間給もらえるんでしょ」
「いいよ。そんなの。冴ちゃんの大変な時に」
背中をさする手を休めもせずにせり姉は答えた。あたしはせり姉が男だったらよかったのにと思った。いとこ同士でも恋愛はできる。せり姉がもし男だったらあたしはせり姉を好きになったのに。
その想像にうっすらときめき始めていると、ゆったりと睡魔がやって来た。あたしは
「もう大丈夫。ありがとう」
と起き上がった。
せり姉はあたしの顔を見詰めると
「冴ちゃん、こんな時間なのに化粧落としてないね。何かあったの？」

とけげんな顔をした。
「色んなことがあったけど、今それを話す体力が無い」
「じゃあ明日の昼にでも、うちにおいで。土曜だし会社休みでしょ？　ブランチの準備しとくから」
そういえば明日のブランチどころか、今夜は夕飯も食べていないんだったと考えながらあたしは「うん」と答えた。今夜はもう何も食べたくなかった。とにかくひたすら眠りたかった。
パジャマに着替えベッドに横になると、羅馬と生山の顔がぐるぐると頭の中で回り始めた。その顔は時に溶け合いまた分裂した。あたしは結局誰を好きだったのだろう。多分二人を好きだった。けれどあたしは二人を失ったのだ。

眠りから覚めるともう陽が高かった。胸苦しさは消えている。あたしは浴室に行くとパジャマを脱いだ。鏡の中のあたしは化粧が残っているせいか、一見いつもより綺麗に見えた。けれど鏡に近づくと、こびりついたファンデーションやマスカラのダマなどが不潔に映った。
あたしはクレンジングを手に取るとまず顔を洗った。顔をすすいで鏡を見た。やっぱり綺麗に見えた。
次にあたしは髪をシャンプーし、ボディーソープをあわ立てて体を洗った。羅馬と生山の体液が洗い流されていくことが快くもあり名残惜しくもあった。今まで二人の男の元で揺れていたというのに唐突に二人を失ったことが信じられないような気がした。
シャワーを止めて全身を鏡に移した。昨夜二人の男が通り過ぎていった体。ふくらみもくぼみも茂みも何もかもが何だか禍々しく感じられた。どれだけ洗い流しても消えないどす黒い記憶が焼き付けられてしまったような気がした。
浴室から出るとケイタイが鳴っていた。あたしは裸のままケイタ

イの着信を見た。生山からだった。
「どうして、突然帰ったの」
と尋ねる生山にエアコンの話をすると、生山はエアコンを入れていないと言い張った。
ではあのエアコンはなぜ作動したのか。あたしは嘘をつく生山にすっかり白けてしまい
「あたしはぜんそくの発作で大変だったのよ。もうあんな思いは真っ平」
と冷たい声で言い放った。
「最後にもう一度会いたい。貸した本を返して欲しい」
と訴える生山に対し
「あたしにあんな苦しみを与えたんだから、本くらい慰謝料として頂戴よ」
と言って、あたしは電話を切った。
『村上龍料理小説集』はまだ読み終わっていない。あの本はなかなか面白いので読み終わる前に返してしまうのはあまりに惜しい。あたしは結局本を読む生山以上に本自体が好きなのだと思った。あんなに会いたいと思っていた生山。けれど今のあたしにとって生山は一冊の本に匹敵する価値すら無かった。
あたしは電話を切ると、黒いノースリーブのハイネックシャツの上に赤い花柄のチュニックを重ね、裾の広がった青いジャージ素材のパンツを履くと、隣室のせり姉を訪ねた。
スッピンで髪を無造作に束ねたせり姉がドアを開けると、キッチンから炒め物の匂いが流れてきた。せり姉は
「座ってて。今、味噌汁あっためるから」
とテーブル脇のクッションを指した。
あたしはクッションに腰を下ろすと、改めてせり姉の部屋の中を見渡した。間取りはうちと同じはずなのに整頓されているせいかずっと広く見える。せり姉はちゃんとしているんだなあと思うと何だか自己嫌悪に駆られた。

水商売をしてすさんだ生活をしていてもおかしくないのに、こうして料理を作り部屋を整えているせり姉。一方れっきとした正社員なのに恋に狂って部屋を荒れ放題に荒れさせているあたし。
こんなにちゃんとしている人が、なぜ水商売をしているのか不思議だった。けれどそんな疑問よりもあたしは昨晩自分に起こった出来事の方が重要だった。
せり姉の作ったチャーハンと味噌汁を食べながら、あたしは昨夜の出来事を伝えた。
あたしの説明が終わるまでせり姉は黙々と食事をしていたが、話が切れた途端
「その取っ組み合いしてた女たちって、絶対生山さんと肉体関係あるでしょ」
と言い切った。
「でも生山さんは『好きとも付き合おうとも言ってない』って」
「そんなこと言わなくたってエッチはできるよ。つーかエアコンのことで嘘ついた生山さんの言い分を信じる訳？　二人は多分生山さんと深いよ。ひょっとしたら貢いでたかも知れないし下手したら妊娠とか中絶までしてたかも知れない。金にルーズな男は女にもルーズだからね」
「ええ？」
あたしは驚いたが、しかしせり姉の言い分は納得できるものがあった。ちょっとした友達関係の女がマンションまでやって来て乱闘騒ぎを起こすのは明らかにおかしい。しかも二人は同じヘアサロンに勤めているのだ。
職場での人間関係を悪化させるのは、誰にとっても好ましいことではない。それでも尚つかみ合いの喧嘩にまで発展したのはそこまでいく理由があったはずだ。金を貢ぐ。子供を堕ろす。確かにそんな背景があれば乱闘が起こってもおかしくはない。
あたしは半分納得しながらも
「でもあたしとあれだけ会ってた人が、他の女と関わってた時間な

んてあったのかな」
　と疑問を口にした。生山のマンションは少なくともうちより整頓されていた。それともその整頓も女たちがやっていたというのか。
「どんなに忙しくたって、女と会う時間を作る人が遊び人なんでしょ。わたしの男友達には毎晩女遊びしときながら彼女を毎朝学校まで車で送ってる人がいるよ。夜遊びをしてない証明にするためにね」
「じゃあひょっとしたら生山さんには、更に女がいた可能性もあるのかな」
「可能性としてはあるんじゃない？」
　あたしはすっかり落胆した。こっちだって羅馬という彼氏がいた訳だから、生山に多少の女関係があったところで責められる筋合いではないけれど、これでは多少などという可愛いレベルではない。
　しかもあたしは生山と寝る前に、女たちのつかみ合いの喧嘩を見ているのだ。その光景から生山のルーズさを悟ってもよさそうなものなのにどうして気付かなかったのか。
　気付くどころか、その光景に劣情を刺激された自分がすっかり情けなくなり
「どうして、あんな男たちと関わっちゃったんだろう」
　とあたしはつぶやいた。
　身勝手な二人の男たち。何をわざわざあたしはそんな男たちと関わっていたんだろうか。部屋をあそこまで荒れさせて。ぜんそくの発作まで起こして。
　するとせり姉は、空になった食器を盆に載せながら
「最近、叔母さんから電話あった？」
　と尋ねた。
　なぜ突然あたしの母親の話をするのだろう？　あたしはけげんに思いながら
「ここ二、三ヶ月きてないけど」
　と答えた。
「随分、ご無沙汰だね」

「うちの親は、あたしにあんまり関心無いから」
「冴ちゃんは、寂しかったんだよ」
そう言い放ち盆をキッチンに運ぶせり姉の後姿を見ながら、あたしはあっと思った。
たいしたいさかいを起こした覚えはないが、子供の頃から両親はドライな人たちだった。あたしは自分が親と上手くいっていないなどと認めたくはなかったけれど、内心では寂しさを感じていたのかも知れない。だからあたしは親と上手くいかず実家を飛び出した羅馬に心のどこかで親近感を抱いていた。
けれど欠乏しているはずの羅馬が、インプット行為をせずひたすら人付き合いばかりをしている様が理解できず、疎外感を覚えていたのだろう。そして羅馬のそうした強さに見えたものを羨みあたし自身、羅馬以外の人とも交際することで羅馬の真似をし、寂しさを埋めようとしていた。
生山と関わるようになり恋愛感情を抱いても、結局どちらも選ぶことができずにいたのは、確かにせり姉の言う通りあたしはどちらのことも本当に好きではなかったからだ。あたしは自分の寂しさを質ではなく量で埋めようとしていた。だから羅馬を選んだ途端に羅馬と破綻しその後生山を選んだ途端に生山とも破綻したのだ。
「寂しいと駄目なんだね。人を見る目が曇ってしまって」
と言いながら、あたしはあらかじめ水きりに伏せられていた食器を布巾で拭うせり姉の横に立ち、食器の素荒いをしようと水道の蛇口をひねった。
じゃばじゃばと水がほとばしる。こんな風に絶え間ない愛情を両親から注がれていたら、あたしはもっと違う女になっていたのだろうか。
「一人暮らしは寂しいものだよ。特にこんな田舎じゃね。この辺って一人暮らしの社会人少ないじゃん。仲間が少ないのって孤独感あるよ」
拭いた食器を食器棚にしまいながら放たれたせり姉の言葉に、ふ

っとあたしは読書を連想した。あたしの周囲には読書をする人が少ない。読書仲間の少なさもあたしの寂しさを呼んでいたんだろうかという気がした。
昔は娯楽が限られていたから、読書仲間を見つけるのもたいして難儀ではなかったんだろうなあと思った。そんな環境にあったならあたしにとって読書をする人の価値はそれ程高くなく、もっと別の観点で恋愛ができたのだろうか。
少なくとも読書をしない人を、強い人なのだと思い込むこともなかったかも知れない。そして読書コンプレックスを持つことも。
あたしはそれを眺めながら
「せり姉は何で、一人暮らししてるの」
と尋ねた。あたしが入居する前からせり姉はこのアパートに住んでいたというのに、あたしはまだ一人暮らしの理由を尋ねていなかった。
「水商売、親にばれたくないから」
「何で、水商売してるの」
「基本的に夜行性だから」
流しに飛んだ水を布巾で拭きながら淡々と答えるせり姉に、あたしは拍子抜けした。確かにせり姉は子供の頃から宵っ張りの朝寝坊だったけれどまさかそんな理由で夜のお勤めをしていたとは。だからせり姉は仕事に対しあまりガツガツしていないのか。
あたしは、なあんだと思いながら
「彼氏、嫌がらない？」
と尋ねた。水商売を始めた当初せり姉はフリーだったがその後、彼氏ができた。せり姉の仕事は恋の障害にならないのだろうか。
「全く嫌がらないね。こっちとしては楽だけど結局愛されてないのかも知れない。ひょっとしたらわたしもその内別れるかも知れない」
せり姉の声が少し震えた。彼氏のこと好きなんだなと思った。あたしはどうだったのと自分の心に尋ねてみた。
羅馬を好きだった？　生山を好きだった？

好きだけど嫌いだったとあたしの心は答えた。そうか、好きだけど嫌いだったのか。だったらしょうがないなあと思いながらあたしはクッションの所に戻りぼんやりとした。

ふと、今日は羅馬と会う約束をしていたんだったなと思い出した。けれどその約束はもう無効だろう。羅馬からは昨夜以来メールの一つも来ていない。

どうしてもっと早く別れなかったんだろうと思った。もっと早く羅馬に見切りをつけて生山の胸に飛び込んでいたら、生山の欠点にもっと早く気付くことができたのに。そうすればもっと早く生山とも切れることができたのに。もっと早く簡単に立ち直ることができたのに。

同時に二人の男を失ったのは初めての経験だったから、あたしは自分が立ち直れるのか不安だった。遅すぎた決断が長すぎる交際期間を生み出し情が芽生えてしまったことが不安だった。

けれどおそらくあたしは立ち直ってしまうのだろう。せり姉の言う通りあたしは二人を本当に好きではなかったのだから。

久し振りに図書館を訪れた。入梅を控えた太陽の陽射しが窓からさんさんと差し込み、その熱気に対抗したクーラーの風が不可思議な空気をかもし出している。

館内の温度と風はいつの間にか変わってしまったけれど、あたしは懐かしさを感じながら、図書館の空気を、胸いっぱいに吸い込んだ。愛しいインクの匂いが鼻腔をくすぐった。あたしを未知の世界へ連れて行ってくれる優しくて刺激的な匂いが鼻腔をくすぐった。『村上龍料理小説集』は面白かった。あれをもっと早く読み終えていれば、生山の人となりも少しは推測できただろう。

いやそれよりも何よりも問題は『トレインスポッティング』だ。あたしはその本が、近所の図書館にあるかどうか問い合わせたとこ

ろ無いという返答だったため購入したのだが、ページを開くと、のっけから脳みそがスピンしてぐちゃりと潰れてしまったような気分になった。

あんな本を常時読んでいる男だと知っていたら、あたしは生山に近づきはしなかった。一読する価値はあるけれど愛読書にしてしまったら確実に人格が破綻する。生山は恐ろしい人だ。

ホールを横切ると、あたしは図書館司書のお勧めコーナーに目をやった。リディア・ディヴスの『ほとんど記憶のない女』のタイトルと装丁に目がひかれる。あたしはその本を開くと冒頭を読みそれを借りることにした。

次は二冊目だ。最初はその取り合わせに驚いたもののあたしも宮本輝と村上龍を気に入ったから、しばらく追いかけてみようかと思った。けれど決別した男の好きな作家を追いかけるのは、まるで未練を持っているかのようだから、むしろ生山の嫌っていた三島由紀夫にチャレンジしてみようか。

あたしはとりあえず『仮面の告白』を手に取った。これは著者の告白だとも言われている本だから楽しみだ。

でも初めての作家ばかりでは、人見知りしてしまうかも知れないから、懐かしどころで星新一なんかもいいかも知れない。あたしは星新一コーナーに行きお気に入りの『マイ国家』を手にした。

小説ばかりでは物足りないので漫画コーナーにも足を運ぶ。子供の頃愛読した『赤毛のアン』シリーズが、漫画化されているのが目に留まった。今よりずっと幼い頃活字で読んだ物語を漫画で読み返すのも一興だ。あたしはアンシリーズを二冊手に取った。

貸付カウンターへ向かうとカウンターは混み合っていた。あたしは列の後ろに並ぶと何気なく返却カウンターに目をやった。

その時あたしは初めての光景を見た。図書館員が返却された本を一冊一冊パラパラとめくって中を確認したのだ。

今までそんなことをしたことが無かったのにどうして？　これからは中身を確認することになったの？　あたしの脳裏で一枚の写真

がはらはらと舞い降りた。その写真は表を返せば羅馬の顔になり裏を返せば生山の顔になったが、その内どっちがどっちの顔やら見分けがつかなくなった。

あたしは今後、図書館で借りた本に挟まっていた何かによって恋を始めることは無いのだと思った。その途端あたしは羅馬と生山が恋しくて恋しくてたまらなくなった。

「返却は四日までです。次の方」

いつの間にかあたしの番になっていた。あたしは虚ろな目で本を差し出し返却予定日のプリントアウトを受け取ると、のろのろと図書館を出て行った。

自動ドアの手前で、腕のすき間から『ほとんど記憶のない女』がするりと抜け床の上に落ちた。あたしはかがみ込みながら開かれたページを見た。

この地で何より奇怪な見物は、他ならぬ人間である。

全くその通りだと思いながらあたしは額の脂汗を拭った。胸の奥から突き上げるように「愛していたのよ」という声が生まれるのを聞いた。じんわりかすかに吐き気がうごめいた。何が愛だ、どこが愛だったというんだ、あんな不純な思いで二人に接していたくせに綺麗ごとで誤魔化すな。

そう頭では思うのにあたしの心は納得しようとしなかった。けれどあたしは一体誰を愛していたのか分からなかった。

あたしはただ誰かを愛したかっただけなのかも知れない。そう思いながらあたしは本を拾い上げた。活字に淫したいと強く思った。かぐわしい活字たちを次々にインプットし、あたしの脳細胞とまぐわらせぐちゃぐちゃに溶け合わせたい。そしてその活字が開くあたしの引き出しをどんどん開け放ちたい。

あたしは図書館で借りた五冊の本を、トートバッグの中にしまうと、自転車にまたがりアパートへと帰って行った。ぼちぼちと紫陽

花が花をつけ始めているのが目に留まる。今日は真夏日になりそうだ。

流れゆく季節の移ろいを感じながら、あたしは飢餓感を覚えていた。早く活字をインプットするのだと心があたしを急き立てた。羅馬と生山の温度を残す心が、早く脳細胞に活字を交らわせるのだとあたしを急き立てた。

（後書き）

久し振りの恋愛モノだから、どんな反応が得られるか楽しみです。

でも今のところ、二人の男の間で揺れてる話ばっかですね。次回はもうちょっと違う感じの恋愛モノを投稿しようと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7723t/

読書コンプレックス

2011年6月2日23時55分発行